

<翻 訳>

モンボド卿の『言語の起源と進歩について』

その源泉, 創まり, 背景

特に弁護士図書館に注目して (1)

I. M. ハメット

伊藤忠夫 訳

<訳者解説>

はじめに, いくつかのことを簡単に述べて, 訳者解説とする。

1. 原著論文について

ここに訳出する著作は, イアン・マクスウェル・ハメット Iain Maxwell Hammett 氏が 1985 年, エディンバラ大学に提出し受理された博士論文で, 原題は次の通りである。

LORD MONBODDO'S OF THE ORIGIN AND PROGRESS OF
LANGUAGE: ITS SOURCES, GENESIS AND BACKGROUND,
WITH SPECIAL ATTENTION TO THE ADVOCATES' LI-
BRARY.

氏からの私信によると, 現在, この論文を基礎にして, 一般読者向けに書き直され, 実質的に別の著作となるものがエディンバラ大学出版局から刊行準備中である。その刊行を待って翻訳するのも一つの考えである。しかし, 筆者としては, モンボド卿とその著作『言語の起源と進歩について』が殆ど知られていないこの日本では, 一般読者向けに書き直されたものにせよ, 博士論文にせよ, いずれにしても多くの読者を期待することはできないと考え, 一般読者向けに書き直されたものよりも学術的に価値を持つ博士論文を訳出することにしたのである。

筆者の翻訳許可の要請を快く受け入れてくださった I. M. ハメット氏に感謝する。

この翻訳がたとえ僅かではあれ, さまざまな面で日本の学界に寄与する

ことが出来るならば、原著者ともども筆者にとっても幸いである。

2. 言語起源論と西欧 18 世紀

言語の起源の問題が極めて古い時代から、思索する人にとって奥深い魅力を持った問題として多くの論考の主題となって来たことは、言うまでもない。しかし、言語起源の問題が驚異的と表現しても良いほどの熱意をもって追究され、爆発的と言っても過言でないほど多くの文章、論文、著書の形で発表された時期は、世界史的に見ても、西欧 18 世紀以外にはないであろう。日本で比較的良く知られていると思われる名前を挙げるだけでも、ルソーがいた、アダム・スミスがいた、コンディヤックがいた、ヘルダーがいた。敢えて推測を言えば、この一世紀間に西欧で発表された直接的に言語の起源を論じた文章は、恐らく百を越すか、あるいは数百に達するかも知れない。

西欧 18 世紀は、実に「言語起源論の世紀」であった。

なぜ 18 世紀なのか。この問いを真正面に据えて、詳細に検討・分析した著作は、筆者の知る限りでは、存在しない。単純な問題ではないからである。筆者もかれこれ三十年前にこの問題に心を惹かれて以来、折りに触れて考えてはきたが、おぼろげな見通しは持てるようにはなっていない、まだ確信には程遠い状態にある。

では、全く五里霧中なのか。そうではない。

一つの事実がある。それは、社会科学の典型的な学問の一つである経済学が、アダム・スミスの『道徳感情論』(1759) から『国富論』(1776) への歩みを中心として、形成過程にあった、ということである。経済学の生成過程において、それぞれの貢献をした当時の思想家たちにとって、自分たちの前に提起されている課題は、言語がいかにして成立したのかという問題と切り離すことの出来ないものである、と意識されていたのである。何が、なぜ、そのような意識を生み出したのか、という問題が生じる。もし筆者の言うように、言語起源論の展開が経済学、いや経済学となるはずの学問体系の追究と切り離せないとすれば、先程の「なぜ 18 世紀なのか」という問題は、少し横にずれて、なぜ経済学、現在のような経済学は、西欧 18 世紀に誕生したのか、という問題でもあることになる。

「問題が横にずれてしまっては仕方がない。何も出ては来ないではないか」と言われるかも知れない。しかし、そうではない。確かに、「なぜ経済学は18世紀に誕生したのか」という問題への解答が直ちに、なぜ18世紀は言語起源論の世紀となったのか、の問題への直接的な解答とはならないであろう。しかし、「なぜ18世紀は言語起源論の世紀となったのか」という関心をもっている言語学者は、全世界を見渡しても、それ程多くはないと言うよりも、数えるほどしかいないであろう。だが、「なぜ経済学は18世紀に誕生したのか」という問題には、数え切れないほどの学者が数え切れないほどの論考を既に発表しているはずである。一例のみ挙げれば、先頃亡くなった内田義彦には『経済学の生誕』という名著がある。筆者は、それらの研究、著作から多くを学ぶことが出来るだろうと考えている。が、いかんせん専門を外れる分野のこととて、何程の進展もないままに時間だけが経って行くのをどうしようもない。僅かに次のものをこれまでに発表しただけである。「Monboddooの *Of the Origin and Progress of Language* について(1), (2)」(愛知大学短期大学部『研究論集』第7, 8号, 1984, 1985年)。

「経済学の生誕」が見られたということから容易に推測されるように、西欧18世紀は、経済学以外の諸社会科学、その他の学問が現代的体系を形成し始めた時期であり、その後の展開による大変貌を遂げたものがあったとしても、それらの諸科学・学問は、この時期に直接に根を降ろしている。その学問に動揺が起こると、人はまず直接的な始源である18世紀へと立ち戻るのが常であろう。しかし、奇妙なことに、一つだけ例外と見えるものがある。言語学である。「言語学史」と題する著作を覗いてみると、まず間違いなく、18世紀を近代言語学の前夜で最も暗い時期として扱っていることが分かるだろう。なぜなのか。これは、根本的には、言語学、つまり言語のいわゆる科学的研究から、言語起源論を切って捨てたからである。近代言語学の立場からすれば、「言語起源論の世紀」=「言語研究の暗黒の世紀」であった。ここでも、なぜか、が提起される。がそれは別にして、このような見解が支配的になったことは、言語学、言語研究にとって、余儀ない歩みであったとはいえ、不幸なことであったと筆者は考えている。そのことについても、なぜ、と問われるだろうが、その問いにここで直ち

に答えることは出来ない。ともかく、少なくとも筆者にとっては、問題山積である。

このような訳で、その理由の私による説明は当面脇に置くことにして、西欧 18 世紀は、実に「言語起源論の世紀」であった。この世紀に発表された多くの著作の中で、恐らく最も大部のものは、ジェイムズ・バーネット、モンボド卿 James Burnett, Lord Monboddo による『言語の起源と進歩について』全六巻 *Of the Origin and Progress of Language*, 6 vols. であろう。この著作は、18 世紀に現れた多くの言語起源論のなかで、発表の時期としては、遅いほうに属する。

ここに訳出する論文は、そのような位置にあるこの著作を取り上げて、その様々な源泉となった著作や人脈、具体的に基礎となった初期の草稿、スコットランドを中心とした広い時代的、歴史的背景を詳細に検討・分析したものである。従って、この論文は、私の求めていた「なぜ西欧 18 世紀は、言語起源論の世紀になったのか」の疑問に、西欧全体ではないにしても、アダム・スミスを産んだスコットランドを正面に据えて、いわば「なぜスコットランド 18 世紀は、言語起源論の世紀になったのか」の疑問に真正面から取り組んだ労作である。この論文によって、「なぜ西欧 18 世紀は」の疑問も基本的には、解かれるであろう。そして、筆者は先に、この問題に、「経済学の生誕」をもたらした側面から接近する意義を指摘したのだが、今度は逆に、この論文による「なぜスコットランド 18 世紀は、言語起源論の世紀になったのか」への解答によって、経済学を初めとする諸社会科学の成立や、その背景となる社会思想の流れの特徴などを追究する新しい視野・視角が獲得されるに違いないと筆者は確信している。

この論文の意義の一つは、そこにある。

3. 西欧 18 世紀とスコットランド啓蒙思想

言語起源論の世紀であった西欧 18 世紀は、また、啓蒙思想の世紀でもあった。

啓蒙思想と言えば、まずフランスである。そして、ドイツである。啓蒙思想と聞いて、イギリスを思い浮かべる人はいない、いや、極めて少ない。例えば、林達夫等による平凡社の『哲学事典』(改訂新版)の「啓蒙思潮」

の項は、「啓蒙思潮あるいは啓蒙主義とは主として18世紀フランスおよびドイツにおける思想運動をさす」という文で始まっている。この改訂新版が出たのが、昭和46年（1971）であった。それから約20年、小学館の『日本大百科全書』の「啓蒙思想」の項の冒頭の文は、「啓蒙思想とは、狭義には、主として一八世紀にフランス、イギリス、ドイツなどで行われた思想文化運動をさしている」となっている。ドイツより前に、イギリスが挙げられているのである。

これはどういうことであろうか。

それは、研究の進展によって、フランスの啓蒙思想家たちの背景には、ホッブス（Thomas Hobbes, 1588-1679）からロック（John Locke, 1632-1704）に至るイギリス哲学の提起した課題群のあったことが認められたことにもよるが、ここ数十年間のスコットランド啓蒙思想の研究の深化がより直接的なきっかけになっていると思われる。

「スコットランド啓蒙思想？聞いたことがないな」と言う人も、少なくないかも知れない。この筆者自身も1983年に或る公開講座でモンボド卿の言語観に関連する発表をした際、愛知大学の樋野芳雄氏から、モンボドとスコットランド啓蒙思想の関係について質問され、なにも答えられなかったのが、「スコットランド啓蒙思想」という把握の存在することを明確に意識した最初であった。「スコットランド啓蒙思想」について詳しいこと触れている余裕はない。ここでは、慶応大学の須藤壬章氏の「「スコットランド啓蒙」の名称に関する覚え書（上）」（『日吉紀要』No.8, 1988年, 12-37頁, （下）は現在印刷中）という用意周到、懇切丁寧な論考にすべてを譲ることにし、三年前の1986年の夏に「スコットランド啓蒙国際会議」（Institute for Advanced Studies in the Humanities Project on the Scottish Enlightenment 1986）がエディンバラ大学で開催されたことと二、三の著作の名を指摘するにとどめる。1983年：I. Hont & M. Ignatieff (eds.), *Wealth & Virtue: The Shaping of Political Economy in the Scottish Enlightenment* (Cambridge U. P.). 1986年：A. C. Chitnis, *The Scottish Enlightenment & Early Victorian English Society* (Croom Helm). 1988年：田中正司編著『スコットランド啓蒙思想研究——スミス経済学の視界——』（北樹出版）。

ところで、日本には短く見積もっても半世紀を超える優れた頭脳によるアダム・スミス研究の蓄積があり、われわれは、スコットランドを除く世界の国々の中では、スコットランド啓蒙思想研究を進めるのに、他の国にはない有利な学問的状況と雰囲気を持っている、と言って良いであろう。そのような状況と雰囲気を形成した中心人物の一人、水田洋氏は、早くも1965年に、『経済学辞典(第二版)』の「啓蒙思想」の項において、スコットランド啓蒙の思想家たちとして、ハチスン (Francis Hutcheson, 1694-1746), ケイムズ卿 (Henry Home, Lord Kames, 1696-1782), モンボド卿 (James Burnett, Lord Monboddo, 1714-99), ヒューム (David Hume, 1711-76), スミス (Adam Smith, 1723-90), ファーガソン (Adam Ferguson, 1723-1816), ロバートソン (William Robertson, 1721-93), ミラー (John Millar, 1735-1801), スチュアート (Dugald Stewart, 1753-1828) の名を挙げている。その後の若い研究者たちによる取り組みによって、日本において、ここに挙げられた人々はもとより、他の多くの思想家などの研究が地道に着々と進められて来ている。

しかし、ここでも一人だけ例外がいるようである。モンボド卿である。

なぜそのようなことになったのか。理由は様々であろうが、彼の主著の題名が『言語の起源と進歩について』であったことが、経済学の生成や哲学的思想の展開を中心とする諸社会科学、社会理論、社会思想の生成・変容・展開により関心を抱く研究者に、モンボドを敬遠させる原因の一つとなったのではあるまいか。そしてまた、当の言語学において、18世紀の言語起源論が殆ど無価値のものとして切り捨てられているという、学問的状況も、モンボドを敬遠させる雰囲気を助長したことは疑いない。

この面においても、この原著論文が日本の学界に対して持つ意義の小さくないことが予想され、期待されるのである。この論文がイギリス哲学・スコットランド啓蒙思想を研究する人々に読まれることによって、日本のスコットランド啓蒙思想研究が一層の幅と厚みを増すことを、筆者はひそかに信じている。

4. ジェイムズ・バーネット、モンボド卿について

では、モンボド卿とは、どのような人だったのだろうか。この論文の第

II 章は「モンボド卿の生涯と人文主義的背景」と題され、目配りのきいた叙述が展開されている。それ以上の説明は不要とも思えるが、モンボド卿がこの世を去って八十余年後、また今からおよそ百十年前に出された *Encyclopaedia Britannica* (9th ed.) の記述は、筆者の評価では、内容的に優れているばかりでなく、それ自体が歴史的意味を持つとも言えるので、ここに紹介しておきたい。

MONBODDO, James Burnett, Lord (1714-1799)『言語の起源と進歩』(1773 年出版) と『古代形而上学』(1779) の著者、18 世紀のスコットランドの文人の中で最も傑出した人物の一人であった。彼は、1714 年、キンカーディンシャ Kincardineshire 州のモンボド Monboddo に生まれ、アバディーン Aberdeen とグロウニンゲン Gronigen で学んだ後、直ちにエディンバラ Edinburgh の法曹界で指導的地位につき、1767 年には民事控訴院判事の一人となった。彼の行動と意見の双方における奇抜さの多くは、同時代の人々に対してはともかく、現代の人々にはそれ程風変わりとは映らない。とはいえ、彼は、弁論におけるユーモラスで機知に富んだ言葉によって、奇抜な印象を高めていたように思われる。彼には、古代の人々にならって夜遅く食事をするとか馬車を使わずに馬に乗って旅をすること等とは別の、そう見られる理由があったのであろう。

社会と言語の起源についての彼の見解や人間が獣類から区別される諸能力についての彼の見解は、当時のおしゃべりな人々に果てしのない笑いの種を提供したのであった。しかし、現代の読者は、彼の奇抜な見解を面白いよりも、むしろ彼の方法の科学的性格とその結論の鋭さに驚くであろう。彼の結論は、ダーウィン主義と新カント主義とに多くの奇妙な一致点をもっている。人間を動物の一種として研究し、文明の問題に光を投げかけるために未開種族についての事実を収集するという彼の考えによって、ダーウィン主義に近づくことになり、ギリシア哲学についての深い知識によって、新カント主義に近づくのである。この二つの点において、モンボド Monboddo は、周囲の人々より遥かに先を歩んでいたのである。ウェルギリウス Virgil の詩行の当を得た彼の言い換

え——

‘人間という種の基礎を据えることは、何と巨大な労苦であったことか’は、進化論者の標語として採用されてもおかしくないであろう。そして、新カント主義者たちは、彼が1773年にロック Locke の批判を公表したとは信じ難いと思うだろう。彼が扱ったような主題に関して派手な文章を書くこと—— ‘今日の作家の間で流行している修辭的で詩的な文体’ ——を考え抜いたすえ採用しないという彼の姿勢は、彼がこの上なく馬鹿氣た逆説を奇抜なやり方で混ぜ合わせているにすぎない人物だという、当時の人々の考えを確固たるものにしてしまったのであった。彼は、1799年5月26日、85歳の高齡で死んだ。

モンボド卿とは、おおよそこのような人であった。

筆者の知る限り、現在まで日本語で読めるモンボド卿に関する最も優れた、最も詳しい文章は、山崎怜・香川大学教授による「あるスミスの蔵書について」(『香川大学経済論叢』第44巻1号[1971年]所収)であることをここに明記しておくことにする。この翻訳がこの文章の更に読まれるきっかけとなることを期待したい。

さて、彼の大著『言語の起源と進歩について』は、相当多くの人に読まれたはずであるが、少なくともイギリスでは挙げ足取り的な批判のほうな激しく、正当に評価されたとは言えなかった。出版当時の正当とは言えない扱いだけでなく、上で指摘したように、その後の言語学は、18世紀の言語研究について全否定に近い姿勢を取ることになり、彼の業績は一層忘却の淵に沈められることになった、と言っても過言ではなからう。

その大著の生成の多面的な検討、分析を行っているこの論文のもつ意義は、言語学史にとっても小さくないものがあると考えられる。

筆者も、近代の比較言語学の幕を切って落としたのは、ウィリアム・ジョーンズ卿 (Sir William Jones, 1746-94) であるとする、アメリカ、日本で通説となっている見解に反対して、モンボド卿の「比較言語学」について論じたことがある。「Lord Monboddó の『比較言語学』(1), (2)」(『愛知大学文学論叢』80, 81 輯, 1985, 1986 年)。「知られざる比較言語学者の話—— ‘近代「比較言語学」の創始者’ モンボド卿」雑誌『言語』1987

年5月号）。

5. 原著者について

訳者解説の最後に、論文の著者、I. M. ハメット氏について簡単な紹介をすることにしよう。

氏は、1933年、ロンドンに生まれた。母方からスコットランド人の血を受け継いでいる。血筋のつながっているフォレスのアレクサンダー・グラント卿 Sir Alexander Grant of Forres は、後にスコットランド国立図書館となる「弁護士図書館」The Advocates' Library を1920年代初期に購入して国に寄付しただけでなく、図書館の建物についても資金を拠出した。（建物は、第II次世界大戦後まで完成しなかった。）

大学は、オックスフォード、レディング Reading, エディンバラに学んでいる。

1970年代の半ばから現在まで、モンボド卿の言語学的、哲学的思想を中心として研究を進めてきている。その間、カナダの二つの大学、サイモン・フレイザー大学 Simon Fraser University, ブリティッシュ・コロンビア大学 University of British Columbia でも教鞭を取り、1977年には、エディンバラで開催されたイギリス18世紀研究学会の第5回大会において、モンボドについての講演を行うよう招待されている。

1980年、来日。当初は広島大学に勤め、その後、広島女学院大学に移り、現在に至っている。その間に、博士論文の完成に努力し、1985年、エディンバラ大学から Ph. D. を取得した。現在は、冒頭に記したように、モンボド卿についての著作の完成に取り組んでいる。

なお、関連論文には次のものがある。

1978: "Roman Law and the Genesis of Lord Monboddo's *The Origin and Progress of Language*." (「ローマ法とモンボド卿の『言語の起源と進歩について』の創まり」) *British Journal for 18th Century Studies*. 1978年春季号。

1985: "The early Monboddo Papers and the Genesis of Monboddo's *Of the Origin and Progress of Language*." (「初期のモンボド文書とモンボドの『言語の起源と進歩について』の創

まり)『広島女学院大学論集』35号。

1986: "Lord Monboddo, and the Impact of the French Encyclopaedia on Eighteenth Century Scottish Philosophy." (「モンボド卿と、18世紀スコットランド哲学に対するフランス百科全書の衝撃」)『広島女学院大学論集』36号。

1987: "An Introduction to Monboddo's *Of the Origin and Progress of Language*." (「モンボドの『言語の起源と進歩について』への序説」)『広島女学院大学論集』37号。

1988: "The Universal Grammars of James Harris and Lord Monboddo." (「ジェイムズ・ハリスとモンボド卿の普遍文法」)『広島女学院大学論集』38号。

＜付記＞

この翻訳について、幾つかのことを指摘しておくことにする。

- (1) 翻訳に当たっては、翻訳の一般的な約束に従った積もりである。
- (2) 原文で、大文字で書かれた表現とイタリックのものは、原則として括弧に入れた。例えば、Science of Man「人間の科学」、*studia humanitatis*「人間性の研究」。

(3) 固有名詞、書名、論文題などは、初出の際に、原語を添えた。しかし、思い違いをしてそれが守られていないことがあるかも知れない。最後の「参考文献表」「索引」(これは原論文にはないが、翻訳には付す予定)で、対照が可能になるようにしたいと思う。

いずれにしても、翻訳で一番泣かされるのが、固有名詞である。原音に忠実にとっても、もちろん限界があるし、変に一貫性を主張すると、既に確立した慣用を無視することになる。筆者としては、基本に『岩波 西洋人名辞典 増補版』を置いたが、スコットランド関係の場合には、上に挙げた田中正司編著『スコットランド啓蒙思想研究』の表記を尊重することにした。仔細に比較したわけではないが、同書も同辞典に依っているようである。

(4) 原論文は、A4版の用紙に、1頁25行でタイプされ、440頁を超える分量がある。したがって、翻訳は、少なくとも5～6回に分けて発表す

ることになる。

＜付説＞原著者による自著紹介

〔訳者の解説とは別に、ハメット氏からモンボド研究の意義を述べつつ、原論文の紹介とも言えるべき文章が寄せられているので訳出しておくことにする。これは、上に挙げた「関連論文」の1987年のものの「序論」である。自著紹介の部分が少ないと感じられたならば、この文章に続けて、本訳355頁の「要約」を読んでいただければ、良いであろう。〕

18世紀思想の歴史において、ジェイムズ・バーネット、モンボド卿（1714－1799）の名前は、よく聞かれるのではあるが、多くの点で彼は、他のスコットランド哲学者たちから離れた存在であり、「スコットランド啓蒙運動」と呼ばれることになったものの中での彼の役割は、これまでずっと曖昧なままであった。

一方で、彼は、生彩を放つ奇人であり、時代とずれた稀に見る学識のある古典学者であり、ただ古代人の知恵のみを敬った。他方、彼は、人間と動物界との関係を逆説的なかたちで強調することにおいて、彼の時代に先んじていたように思われる。それは特に、尾を持った人間が存在すると信じていたことや「オラン・ウータン」の人間性に対する彼の信念に表れているが、それらは、当時においては、彼を奇人だとする噂を確かなものにするだけであった。

このように評価の定まらないところが幾分残り、スコットランド啓蒙運動との関係がまだ不明確ではあるが、モンボドの名声は、今日、これまでにない程高まっている。彼のネオ・プラトン主義者の友人、ジェイムズ・「ヘルメス」・ハリスと共に、モンボドは、主要な18世紀言語哲学者の一人と見られている。そして、ハリスと同様に彼は、当時流行していたロックの観念の理論の批判者として、啓蒙運動の歴史の中に一定の位置を占めている。彼はまた、理論的社会学のスウェーデン学派の中で、最も独創的で、学問的な人々の一人として認められている。その人々の中には、他

に、アダム・スミス、アダム・ファーガスン、ウィリアム・ロバートソン、そして、モンボドの文学的競争相手、ケイムズ卿がいた。

モンボドのロック批判、言語理論、そして原始社会論は、すべて、彼の未完の『言語の起源と進歩について』の六巻(1773-1792)に包含されている。その第II巻では、この著作は、重要さにおいてハリスの『ヘルメス』(1751)に匹敵する普遍文法を含んでいる。そして、その第I巻は、今や、言語の起源に関する18世紀の論戦へのイギリスの主要な貢献と見られている。その論戦は、啓蒙運動の他の著名な人物と共に、ルソー、コンディヤック、アダム・スミス、ヘルダーが加わった、人間の本性に関して広範な関わり合いを持つ国際的な論戦であった。

『言語の起源と進歩について』が、当時認められないままであったわけではない。特に大陸においてはそう言える、というのは、この著作は、フランス、イタリア、ドイツにおいて、相当の影響を及ぼしたからである。モンボドの著作の縮約版のドイツ語訳への序文において、ヘルダーは、言語史の分野におけるこのスコットランド人の優秀性を認め、第I巻に対する敵意ある論評がロック的認識論を擁護しようとする批評者たちの陰謀のせいであるとした。ロック的認識論には、ヘルダーは、ライプニッツ同様に、批判的だったのである。

イギリスにおいては、『言語の起源と進歩について』全体に対する反応は、遥かに冷ややかであった。にも拘らず、第I-III巻は第2版が出され、第I巻は、僅かな改訂がなされた。(実際、モンボドに似た言語に関する諸見解は、次の世紀のごく遅くなっても見出される。例えば、ホイットニーの著作である。そういうことが起きたのは、モンボドの弟子に当たるジョン・ハンター教授の論文が基になっている所があるかも知れない。というのは、ハンターの論文が『ブリタニカ百科事典』の幾つかの版で繰り返し現れたからである。)

モンボドも、自分自身のことを単に変人だと思ってはいなかった。彼は、多くの有名な友人のいたロンドンで、かなりの文学的名声を得ていた。彼の文通相手には、著名な学者、聖職者、王立協会の会長、大臣がいた。中には、グリム・ソークリン(『ベオウルフ』の最初の編者)、ウィリアム・ジョーンズ卿、ジョセフ・バンクス卿がいる。彼は、それらの人々と実に

様々な主題を論じた。例えば、サンスクリット語、ギリシア語、アイスランド語、自然史、古代エジプト、類人猿等の問題である。

しかし、恐らく最初の二巻は例外だろうが、18世紀思想の研究者たちが『言語の起源と進歩について』に親しんでいるとは言い難い。そして、モンボドによるニュートンの形而上学の批判である『古代形而上学』（1779-1799）は、殆ど知られていない。これらの著作の複製版が現れてはいるが、どちらについても校訂版は存在しない。また、クロイドの有益な伝記（1972）は存在するものの、これまで、英語で書かれたモンボドの思想の充分に詳しい研究もないし、彼の時代の文脈に彼を置こうとする真剣な試みも見られない。モンボドは、言語学の歴史に関する本や論文では、しばしば名前が挙げられてはいるが、彼の考えは、簡単に、『言語の起源と進歩について』全体の文脈から離れて、論じられるのが普通である。まして、この著作を産みだした当時の知的発酵作用を視野に入れることは全くない。『古代形而上学』は、殆ど全く論じられていない。

このような状況は、幾つかの理由で、理解できるものである。第一に、両著作とも、長大であり、博学であることを要求する。両著作とも、古典文学、ローマ法、スコットランド法学、旅行文学、アメリカ・インディアン諸言語、動物学と人類学の古代および近代の諸研究、その他多くのものを取り込んでいるからである。

同時にまた、現代の読者にとっては、両著作ともその内容の多くについてまごつかせるようなところがある。例えば、プラトン化されたアリストテレス的哲学が、殆ど自明であるかのように提出されている。つまり、その哲学の諸原則は、（トマス・リードの当時の常識哲学の諸原則とほぼ同様に）完全に容認されるには、繰り返し解説され、当惑させるほど豊富な資料によって支えられさえすれば充分なのだ、とされているように思われるのである。そのことは、アリストテレス的形而上学の性質ともある程度関係している。というのは、アリストテレス的形而上学は、われわれが必ず利用し、われわれに現実についての情報を与えてくれる、自明の諸原則と諸範疇、例えば、実体と偶有性の範疇とか、作用と潜勢力の区別、を分析することに関わっているからである。それはまた、モンボドのゆるぎない様々な信念やローマ法の諸原則に染まっている18世紀スコットランド

の弁護士の法廷弁論的文体、また、言語、法、論理学、哲学のいずれに適用されても変わることはない、彼のアリストテレス主義の一貫性とも大いに関係がある。

モンボドの知的文脈の無視についていうと、確かに、直ちに判ることがだが、彼は、独自の独特な人物であるように思われる。モンボドの原始社会論は、しばしば、他のスコットランドの哲学者のものと比較すると有益であるが、そこにおいても様々な違いがある。モンボドは、他の点では、確かにはっきりと変人と見られるし、学識ある文法家でもある「昔を称賛する人物」*laudator temporis acti* と見られるのである。

しかし、モンボドは、決して世間の事柄と縁のない孤立した人物ではなかった。スコットランドの文芸復興の中心にいて、彼は、文化的、社会的な生活において活発な働きをしたし、多くの点でエディンバラの知識人の典型的な一員であった。

目 次

謝 辞	(ii)
要 約	(viii)
省略記号	(x)

第 I 部

第 I 章 序 論

1. 論文の目的と構成	(1)
2. 『言語の起源と進歩について』と「弁護士図書館目録」	(2)
3. 「モンボド文書」と『言語の起源と進歩について』	(9)
4. 各章の概略	(12)

第 II 章 モンボド卿の生涯と人文主義的背景

1. 家族的背景	(16)
2. 教育	(18)
3. ロンドンでの生活と法律家としての経歴	(19)
4. 文学関係の経歴	(20)
5. 友人と文通者	(22)
6. モンボドと 18 世紀におけるスコットランド人文主義の名残り	(24)

第 III 章 弁護士図書館と人文主義的法学の伝統

1. 弁護士会のスコットランド啓蒙思想に対する影響	(29)
2. 弁護士図書館の創設と 17 世紀後期の人文主義的文化の復活	(31)
3. ジョージ・マッケンジー卿の人文主義的原則と弁護士図書館	(33)
4. ギヨーム・ビュデとフランス学派の人文主義法律家	(36)
5. フランス的慣習 <i>mos Gallicus</i> と完全な歴史の概念	(38)
6. トマス・ラディマンと人文主義の衰退	(41)

第 IV 章 18 世紀スコットランドの言語的、文化的ディレンマ (43)

第 V 章 『言語の起源と進歩について』とロック的人間の科学

1. 序 説	(48)
--------	------

2. 大陸の自然法の影響	(53)
3. 哲学的歴史としての『言語の起源と進歩について』 と言語の起源に関する論戦	(59)
4. モンボドによるアリストテレス的質料形相論の復興	(62)
5. 結 論	(65)
第 VI 章 『言語の起源と進歩について』とキケロ的修辞学	
1. キケロ主義	(69)
2. キケロ的修辞学と『言語の起源と進歩について』	(72)
3. 修辞学と趣味礼賛	(76)
4. アダム・スミスとスコットランドの大学における論理学の修辞 学との交替	(78)
5. 修辞学とフランス・アカデミーの影響	(88)
6. トマス・シェリダンと雄弁運動	(92)
7. 『言語の起源と進歩について』と英語の改善	(101)
第 VII 章 文学協会, ギリシア古代文化愛好と 『言語の起源と進歩について』の創まり	
1. 序 説	(104)
2. セレクト協会	(105)
3. グラスゴウの文学協会とギリシア古代文化愛好	(109)
4. ジェイムズ・ムア教授の蔵書	(114)
5. ムアとファウルズ兄弟の大陸との関係と その『言語の起源と進歩について』との関連	(117)
第 VIII 章 言語の起源に関する 18 世紀の論戦, スコットランドとの 関係で	
1. 論戦の背景	(121)
2. ロックの影響	(122)
3. バーナード・マンドヴィルの役割	(126)
第 IX 章 『言語の起源と進歩について』とフランスの百科全書	
1. 18 世紀スコットランドにおける『百科全書』	(131)
2. 『言語の起源と進歩について』と精神の自然史	(137)
3. 種の実在に関する論戦	(140)

1990. 1	モンボド卿の『言語起源と進歩について』（伊藤）	353（1015）
	4. 『百科全書』のモンボドに対する影響	(148)
第 X 章	ルソーの第二論文の影響	
	1. ルソーとスコットランドの哲学者たち	(159)
	2. 『言語の起源と進歩について』における人間の自然史と 『人間不平等起源論』	(164)
	3. 言語の起源に関するルソーとモンボド	(177)
第 XI 章	『言語の起源と進歩について』に対するド・ビュフォンの 「自然史」の影響	
	1. 「モンボド文書」76: 「種としての人間の変種のビュフォンによ る説明からのノート」	(191)
	2. 文献目録	(203)
	3. 「モンボド文書」109: 「オラン・ウータンとオラン・ウータンが 人間であるかどうかについて」	(212)
第 XII 章	アダム・スミスの言語に関する論考	
	1. コンディヤックの影響	(215)
	2. スミスの言語発達論	(217)
	3. スミスの『諸考察』と『言語の起源と進歩について』	(221)
第 XIII 章	ジェイムズ・ハリスの『ヘルメス』の影響	
	ジェイムズ・ハリス (1709-1780)	(227)
	1. 序 説	(229)
	2. ハリス, モンボドと古代の文法家たち	(254)
	3. スカリゲルとサンクティウスの影響	(260)
第 XIV 章	初期のモンボド文書 (c 1750-1766) と『言語の起源と進歩について』の創まり	
	1. 「中国語について」	(269)
	2. 装丁二つ折り草稿の第4巻	(272)
	3. 装丁二つ折り草稿の第5巻と「言語についての論考」	(283)
	4. 『言語の起源と進歩について』の創まり	(288)
	5. シャルル・ド・ブロスの影響	(295)
第 XV 章	結 論	

第 II 部

付 録	I:『言語の起源と進歩について』第I巻への第2版(1774)	
	における主要な加筆の一覧	(316)
付 録	II: 1. 言語に関する諸著作	(317)
	2. 旅行記と航海記	(322)
	3. 古 典	(331)
	4. 歴史書	(342)
	5. 法律書	(345)
	6. その他	(346)
付 録	III:モンボドが参考にした、「弁護士図書館目録」1742-1807	
	に記載されていない諸著作	(349)
付 録	IV:モンボドが1763-1765年にパリで参考にした,	
	フランス王立図書館その他の諸著作	(351)
文 献 目 録		(352)

[原論文では、この後に約90頁の各章への注が続いているが、訳文では、注は各頁下部に収めるようにした。また、括弧内の数字は、参考のために、原論文のノンブルを示したものである。]

謝 辞

私の指導教授、デイヴィッド・アバークロンビー David Abercrombie 教授とマン・ケンプ Man Kemp 氏にその指導と励ましに対して、また、当初から大きい援助を与えられたスコットランド国立図書館 National Library of Scotland の館員の方々に、感謝します。

要 約

モンボド卿の『言語の起源と進歩について』

その源泉，創まり，背景

特に弁護士図書館に注目して

この論文は、モンボド卿の『言語の起源と進歩について』（全6巻，1773－1792）の源泉と初期の展開を同時代の知的背景に照らして検討し、その時代の文脈におけるこの著作の目的と意義のより十分な理解を目的とする。この論文は、モンボドによる弁護士図書館所蔵の文書・著作の広範な活用と、この図書館の創設と結び付いていた16世紀のスコットランド法学の人文主義的伝統の彼に対する影響とに、特に関心を向けている。

この論文は、『言語の起源と進歩について』の最初の二巻を集中的に検討しているが、それは、この二巻が言語の自然的歴史と普遍文法を扱い、モンボドの言語観の真髄を含んでいるからである。しかし、修辞学（残りの四巻の主題）は、背景として必須のものであり、従って、概括的な形で扱われている。

モンボドの主要な目的は、イングランドとの合邦以後のスコットランドが直面している言語的、文化的、哲学的な諸問題に対する解答を提供することであったこと、そして、彼の解答は、「スコットランド啓蒙運動」をその本来の人文主義的諸原理に立ち帰らせることを含んでいた、との主張が提出されている。言い換えれば、ロックとヒュームによって提起された「人間の経験的科学」の代わりに、モンボドは、アリストテレス的な技能の言語の諸原理に基づく人間的科学を提案したのであった。モンボドの哲学的、言語的、法学的諸見解は、完全に首尾一貫している、との主張も提出されている。

省 略 記 号

- OPL *Of the Origin and Progress of Language* 『言語の起源と進歩について』
- MP Monboddo Papers 「モンボド文書」
- AM *Ancient Metaphysics* 『古代形而上学』
- NLS National Library of Scotland スコットランド国立図書館
- CAL Catalogue of the Advocates' Library 「弁護士図書館目録」
- Cloyd E. L. Cloyd, *James Burnett, Lord Monboddo* (Oxford, 1972)
E. L. クロイド 『ジェイムズ・バーネット, モンボド卿』
- TRSE Transactions of the Royal Society of Edinburgh 『エディンバラ王立協会会報』
- EB *Encyclopaedia Britannica* 『ブリタニカ百科事典』
- PB Pocket Book (Monboddo Papers) 「ポケット・ブック」(モンボド文書)
- DHI *Dictionary of the History of Ideas*, 4 vols, ed. Philip P. Wiener (New York, 1974) 『諸観念の歴史辞典』
- JHI *Journal of the History of Ideas* 『観念の歴史誌』
- SV *Studies on Voltaire and the Eighteenth Century* 『ヴォルテールと18世紀研究』
- MSLL Monograph Series on Language and Linguistics 「言語と言語学論文シリーズ」

[訳文では、省略記号ではなく、右に添えた書名などを用いるよう努めた。]

第 I 章 序 論

1. この論文の目標と構成

ジェイムズ・バーネット、モンボド卿 (1714–1799) による記念碑的著作、『言語の起源と進歩について』(全 6 巻, 1773–1792) のこの研究は、次のものに基づいている。この著作の公刊された諸版本、弁護士協会図書館 Library of the Faculty of Advocates (現在のスコットランド国立図書館) の 18 世紀の諸図書目録、そして、そこに収蔵されているモンボド文書 Monboddo Papers とである。⁽¹⁾

(1) 『言語の起源と進歩について』全 6 巻

第 I 巻, 初版, Kincaid & Creech, エディンバラ, T. Cadell, ロンドン, 1773 年; 第 2 版, J. Balfour, エディンバラ, T. Cadell, ロンドン, 1774 年。第 II 巻, 初版, J. Balfour, エディンバラ, T. Cadell, ロンドン, 1774 年; 第 2 版, Alex. Smellie, エディンバラ, Cuthell and Martin, ロンドン, 1809 年。第 III 巻, 初版, J. Balfour, エディンバラ, T. Cadell, ロンドン, 1776 年; 第 2 版, J. Balfour, エディンバラ, T. Cadell, ロンドン, 1786 年。第 IV 巻, 初版, J. Bell, エディンバラ, T. Cadell, ロンドン, 1787 年。第 V 巻, J. Bell, エディンバラ, T. Cadell, ロンドン, 1789 年。第 VI 巻, Bell & Bradfute, エディンバラ, T. Cadell, ロンドン, 1792 年。

参照頁は、第 I 巻では、第 2 版である。第 II 巻では、第 2 版で改訂はないが、第 I 巻の第 2 版には実質的な付加がある。主要な付加は、この論文の付録に一覧できるようにしてある。そのうちで最も重要なものは、次の通りである。

- a) 序文 (i–ix). これは、ルソーの『人間不平等起源論』の影響を自認するもので、人間の自然状態について長く触れている。モンボドは、ルソーと違って、これを、仮説ではなく、現実の原生的状態とみなしている。つまり、序文で言っているのだが、彼は『言語の起源と進歩について』を人間の自然的歴史、そして特に人間の精神の自然的歴史と考え、推測による歴史とは考えないのである。この自然的歴史は、人間が技能の生き物であることを明らかにする。彼の言うところによると、彼は、E. B. ド・コンディヤック Condillac の『人間認識起源論』*Essai sur l'origine des connaissances humaines* (1746) は、『批評評論誌』*Critical Review*, II (1756), 193–218 頁所載のトマス・ニュージェント Thomas Nugent の翻訳 (*An Essay on the Origin of Human Knowledge; being a supplement to Mr. Locke's Essay on the Human*

この研究は、モンボドの未完に終わったこの著作の源泉と初期の展開を当時の知的背景に照らして検討し、その時代の文脈における『言語の起源と進歩について』の目的と意義をより十分に理解しようとするものである。

何らかの重要性を持つすべてのモンボドの源泉に關説しようとする試みはしたが、彼の言語哲学についての解説は、最初の二巻(1773及び1774)に限られている——即ち、第一義的に言語の哲学的歴史と普遍文法とを扱っている巻である。この二巻は、モンボドの言語に関する思想の精髓部分を含んでいるのである。残りの四巻は、古代修辞学の解明であって——いずれにせよ、独創性を主張できないのだが——、従って、概括的にのみ扱われる。

弁護士協会の一員として弁護士図書館で研究し、モンボドは、その最も

Understanding [1756]) の書評以外に何も読んでいないという。

本論文第X章を見よ。

- b) 第I部, 68-71頁。実体の本質の知識を持つことを否定していることに注目せよ。

「それらについて我々が知っていることと言えば、一定の特性言い換えれば特質だけである。そして、それらは、他の事物に対する諸関係以外の何物でもない。」これはモンボドのアリストテレス的質料形相論の復興に関して、基本的重要性を持つ点である。彼の見解は、アクウィナス Aquinas のそれに似ている。つまり、彼は物質的事物の物理的な構成には関心を持ってはいない。形而上学は、経験的科学と同じものではない。F. C. コプルストン Coppleston『アクウィナス』*Aquinas* [Penguin Books, 1955年] 35-6頁を見よ。

- c) 第II部, 262頁-9頁。尾を持つ人間の存在を信じないことに対して、ビュフォンを攻撃していることに注目せよ。この注は、恐らく、一層の嘲笑を引き起こしただろう。しかし、モンボドは正しかった。(オスカー・シャーウィン Oscar Sherwin「尾を持った人間——モンボド卿」“A Man with a Tail——Lord Monboddo”, 『医学史研究』*Journal of the History of Medicine*, 1958年7月, 435-68頁を見よ。)

また、本論文第XI章も見よ

- d) 第II部, 第IV, V章(270-312; 313-60頁)。この二章は、それだけで独立的に、「オラン・ウータン」を扱い、ビュフォンとリンネの説明を攻撃した章である。モンボドは、これ以前には、自分の説明がビュフォンの説明に対立するものであることを知らなかったようである。本論文第XI章を見よ。

偉大な時期にあったスコットランドの文化的活動期の中心にいたのであった。この論文は、弁護士図書館(彼は1751年から1756年まで管理者 curator を勤めた)の所蔵著作・文書の広範な活用と、その図書館の形成にまで至ったスコットランド法学の、ケムブリッジ・プラトニズムによって修正を受けてはいたが、人文主義的伝統の彼に対する影響とに特に関心を向けている。⁽²⁾

『言語の起源と進歩について』の創まりを、弁護士図書館の所蔵著作・文書との関係で跡付けてみると、スコットランド知識人の武器庫としてのこの図書館の役割が、独特なそして細部にわたる形で、例証されるはずである。(そうすることは同時に、18世紀中に見られる所蔵著作・文書の変化が、スコットランドの文芸復興に力をかけたイングランド、フランス、オランダからの知的影響をいかに反映したかについて、ある程度示すことになるだろう。しかし、このことはここでは論じない。)

2. 『言語の起源と進歩について』と弁護士図書館の図書目録

弁護士図書館の構想は、1680年頃、当時、法務長官 Lord Advocate であったロウズホーのジョージ・マッケンジー卿 Sir George Mackenzie of Rosehaugh (1636-1691) によって初めて提出された。彼は、1682年、協会の長 Dean of Faculty としてその計画を成就させた。⁽³⁾

最初の印刷された目録は、1692年に現われた。⁽⁴⁾ それは、所蔵文献を、法、歴史、神学、その他、という四つの項目の下に一覧表にした分類目録である。法学関係の著作は、158頁のうち89頁を占めている。しかし、歴史、古典、哲学(デカルト Decartes, ベーコン Bacon, ホッブス Hobbes を含む)も十分に収められている。当代の文学作品は、稀である。収録されている法学関係の著作の大部分は、17世紀のもので、大陸関係のものであり、しばしば出所は、オランダである。自然法学者、グロティウス Grotius とプーフェンドルフ Pufendorf の著作は、スコットランド啓蒙運動に形成

(2) 本論文第III章を見よ。

(3) W. K. ディクソン Dickson 「弁護士図書館」 "The Advocate' Library", 『図書館協会記録』 *The Library Association Record*, 1927年9月, 170頁。

(4) 同上, 171頁。

を促す影響を持ったのであったが、既に目立っている。しかし、16世紀の歴史的＝文献的法学のフランス学派の主要な人物の大多数も、含まれている。例えば、ビュデ Budé, オトマン Hotman, ボダン Bodin, キュジャース Cujas, J. J. スカリゲル Scaliger である。⁽⁵⁾ 事実、ジョージ・マッケンジー卿による目録序文では、このフランスの人文主義者との関係を詳しく述べており、より後の17世紀の大陸の自然法の影響には触れていない。その上、目録は、ジョセフ・スカリゲルとジョージ・ブカナン George Buchanan に捧げられており、伝統的なスコットランドの人文主義の大陸との関係と、ローマ法の復活への道を開いたのは、ルネッサンスであったという事実を示している。⁽⁶⁾

この人文主義的伝統を考察する際には、フランス・アカデミーの歴史——後の目録にその影響が反映されることになる——が目録に挙げられていることは注目する価値がある。勿論、デモステネス Demosthenes, ハリカルナッセウスのディオニュシオス Dionysius of Halicarnassus, クインティリアヌス Quintilian, キケロ Cicero の著作が含まれていても、驚くべきことではない。⁽⁷⁾

この図書館の方針は、教会法と市民法、ギリシアとローマの古典、イギリスの歴史と古代文化研究との完全な収集を行うことであった。そして、この方針は、次の世紀の初期まで継続した。にも拘らず、既に大陸との法学関係の結び付きだけでなく、文学的結び付きが存在していたのである。1688年から、次の二つの影響力ある雑誌が定期的に注文されていた、『知識人雑誌』 *Journal des Savants* とベイユ Bayle の『文化共和国情報誌』 *Nouvelles de la république des lettres* である。更に、目録には幾冊かの旅行記が見られる。⁽⁸⁾

(5) 本論文第III章を見よ。

(6) 「ジョージ・ブカナンに引用された碑銘におけるジョセフ・スカリゲルについて」 “A Josepho Scaligero in Epitaphio Georgii Buchanan’s mutuatum.” ユリウス・カエサル・スカリゲル Julius Caesar Scaliger (1484–1558) とジョージ・ブカナン (1506–82) については、本論文第III章を見よ。

(7) 本論文第IV章を見よ。

(8) I. S. ロス Ross 『ケイムズ卿と彼の時代のスコットランド』 *Lord Kames and the Scotland of his Day* (Oxford, 1972年) 27頁。

1709年に、この図書館は、ロンドンの書籍出版業組合事務所 Stationer's Hall で出版されたあらゆる本の一冊を受領する許可を与えられた。その結果、図書館は、急速に大きくなり始め、18世紀初期の5,000冊から1742年には25,000冊に達した。スコットランドの文芸復興が既に始まっていた世紀の半ばまでに、この図書館は、スコットランドの国民的な図書館としてばかりでなく、「ヨーロッパの偉大な研究図書館の一つ」⁽⁹⁾として認められていた。

トマス・ラディマン Thomas Ruddiman (1674-1757) は、スコットランド人文主義の歴史において重要な人物の一人だが、1730年に保管者 Keeper となった。彼は、この図書館の第二の創設者と呼ばれているが、それは、この図書館がスコットランド啓蒙運動の武器庫となったのが、彼の下でのことだったからである。1742年、ウォルター・グッドール Walter Goodall と共に、彼は完全な著者目録を出版した。これは、ローマの大枢機卿 Cardinal Imperiali の図書館の目録に範を取った、約25,000項目の大型二つ折り本である。⁽¹⁰⁾

1742年目録には、ベーコンとロック、初期のフランス啓蒙運動（ベユとヴォルテール）、大陸の自然法（大部分はグロティウスとプーフENDORF）、そして、旅行文学の重要性が反映されている。これらすべての資料は、スコットランドの哲学者たちの人間と社会の探究に対して、創造的刺激と素材とを提供したのである。⁽¹¹⁾

自然哲学は、ベユ、コペルニクス Copernicus、ケプラー Kepler、ペティ Petty、ニュートン Newton の著作に代表されている。そして、王立科学アカデミー Académie Royale des Sciences と王立協会 Royal Society の紀要も入っている。ジョン・ウィルキンズ John Wilkins は、王立協会学派の一員で、モンボドに強い印象を与えた哲学的言語の発明者であるが、彼の著作も収録されている。⁽¹²⁾

(9) 上記ディクソン、174頁、ロス、27-8頁。

(10) 上記ディクソン、173頁。

(11) 上記ロス、28頁。

(12) 『言語の起源と進歩について』第II巻、第3部、第13章「ウィルキンズ司教の発明した哲学的言語について」を見よ。

他方、16, 17世紀のスコットランドと大陸の言語研究の伝統も決して無視されてはいない。ブカナン、ビュデ、ボダン、キュジャース、オトマン、スカリゲルたち、ヴォシウス Vossius, サルマシウス Salmasius (彼の『ギリシア的なものについて』 *De Hellenistica* はモンボドによって利用された) とすべてよく収録されている。J. C. スカリゲルの『ラテン語の起源について』 *De causis linguae Latinae* は特に重要である。フランスの諸アカデミーの影響は注目すべきであるが、特にその辞典が収蔵されているアカデミー・フランセーズ Académie Française, そして、碑文と文学王立アカデミー Académie Royale des Inscriptions et Belles Lettres の影響である。後者の『論集』 *Mémoires* (1710-1725) は、将来、アダム・スミス Adam Smith とモンボドに、そして、スコットランドの文学研究の発展に、重要な影響を与えることになる。⁽¹³⁾

ポール・ロワイヤル Port Royale の影響も著しい。1742年目録には、『一般・理性文法』 *Grammaire générale et raisonnée* (アムステルダム, 1703), ラテン語のための『新教本』 *Méthode nouvelle* (パリ, 1681) とギリシア語のための『新教本』 *Méthode nouvelle* (パリ, 1696) が含まれている。⁽¹⁴⁾

ヒューム Hume が保管者として職を持っていた時期 (1752-1757) は、モンボドが管理者の一人であった時期 (1751-1756) と殆ど一致していた。そして、この図書館の性格に関する彼らの見解の違いは、彼らの哲学的立場の違いを反映するものであった。1754年に、ヒュームは、当代の古典的著作の収集内容を改善しようとした。しかし、モンボドと彼の友人ヘイルズ Hailes (両者とも後に民事高等裁判官になったが) は、ラディマンのように、まだ弁護士図書館を“有益な知識”の集積所とみなしており、三冊の「下品な」書物を排除するように命令したのである。三年後、ヒューム

(13) 本論文第VI章を見よ。

(14) モンボドの言語に関する最も早い論文「中国語について」(モンボド文書250) は、彼が21歳の1735年頃オランダで書かれ、ポール・ロワイヤル文法に強く依存している。しかし、『言語の起源と進歩について』においては、古代の「アリストテレス的」文法を復活させており、それはポール・ロワイヤル文法の拒否を含意する。本論文第XV章を見よ。

は、保管者の地位をアダム・ファーガスン Adam Ferguson に譲ったのである。⁽¹⁵⁾

しかし、1773年までには、フランス文学、当代の詩と小説の無いことが、ある管理者の報告で遺漏として指摘され、上品な文学の紳士的な図書館という考えが、収集本に影響を及ぼし始めた。⁽¹⁶⁾

1776年、もう一つの図書目録が現れたが、これは、1742年以後に収納した本を記載したものであった。『言語の起源と進歩について』において、モンボドによって引用された著作の大多数は、この1776年目録に収録されているものである。その大部分は旅行記で、様々な民族の風習、習慣、制度、言語についての情報を含むものである。その多くは、モンボドが管理者の一人であった期間に収納されたものであるに違いない。⁽¹⁷⁾

この旅行文献の際立った増加とは別に、1776年目録では、予想されるかも知れないが、フランス啓蒙運動の衝撃の印がより多く認められる。例えば、モンテスキュー Montesquieu, ヴォルテール Voltaire, ルソー Rousseau, ビュフォン Buffon の著作と『百科全書』そのものが収納された。また、自然史により力が入れられ——ビュフォンと並んで、リンネ Linnaeus の著しい数の著作があるが——、これは、1787年に出された目録への付録にまで続く傾向である。勿論、ベーコン、ロック、ニュートン、大陸の自然法は、まだ非常によく収集されている。⁽¹⁸⁾

大体において、これらの後から収納されたものは、ロック的経験主義の成長を反映している。モンテスキュー、ビュフォン、ルソーと百科全書学派の人々は、適当に配列すれば、人間の自然的歴史を構成することになるようなデータを求めて、旅行文献を利用していた。そして、彼らの著作は(それらが今度は代わって、それらの事実の資料となったのだが)、『言語の起源と進歩について』と全体としてのスコットランド啓蒙運動の発展に

(15) F. C. モスナー Mossner 『デイヴィッド・ヒュームの生涯』 *The Life of David Hume* (Oxford, 1980年) 230, 252-3頁。

(16) ダグラス・ダンカン Douglas Duncan 『トマス・ラディマン』 *Thomas Ruddiman* (Edinburgh, 1965年) 第III章。

(17) モンボドが参考にした弁護士図書館の書籍一覧を見よ。

(18) 弁護士図書館 1776年目録。

として、極めて重要であった。⁽¹⁹⁾

モンボドは、従って、弁護士図書館の収蔵書に反映している二つの、明らかに対立する、伝統を仲裁するものと見られるかも知れない。つまり、ローマ法を特徴付けるアリストテレス的合理主義と、フランス啓蒙運動を特徴付ける新しい18世紀的なロック的経験主義の二つである。(この二つを対立するものとするのが、少なくとも、当時の人々の物の見方である。実際、合理主義的要素と経験主義的要素の双方が、ロックの諸著作には存在しており、そのことをモンボドは理解していたように思われる。また、フランス啓蒙運動も決してデカルト主義の影響を免れていた訳ではない。)⁽²⁰⁾

1776年目録のもう一つの重要な側面は、幾つかの大陸のアカデミーの紀要の存在である。例えば、ベルリン・アカデミー(科学と文学王立アカデミー Académie Royale des Sciences et Belles Lettres)、モンペリエ王立アカデミー、そして、碑文と文学王立アカデミーの『論集』(1710-1763)で、これらは、1742年以前から引き続き収納されてきており、スコットランドの諸文学協会の論戦に広範な影響を及ぼしていたのであった。文学作品の収集を行うという保管者と管理者たちの新しい関心は、更に、王立大学の修辞学教授で碑文と文学王立アカデミーの会員であったシャルル・ロラン Charles Rollin の主要著作の幾つかの翻訳が含まれていることに現れている。『文学の教授と研究の方法、趣味に関する省察を付す』*Method of teaching and studying the Belle Lettres, with reflections on Taste* (ロンドン, 1768), 『エジプト人等の古代史』*Ancient History of the Egyptians etc.* (第5版, ロンドン, 1768), 『古代人の技能と科学の歴史』*History of the Arts and Sciences of the Ancients* (3巻, ロンドン, 1768) である。⁽²¹⁾

アダム・スミスは、ロランの諸著作を知っていた。そして、モンボドは、趣味の礼賛には反対したが、二つ目と三つ目の著作と彼の関心との関係は、明白である。これは特に、『古代人の技能と科学の歴史』について当て

(19) 本論文第V章を見よ。

(20) 本論文第IX章を見よ。

(21) 本論文第VI章を見よ。

はまることで、その第二巻は、文法、言語研究、詩、修辞学を扱っていたのである。⁽²²⁾

1776年目録の補遺（一層の旅行文献の拡充が目立つが）は、1787年に現れ、1807年には、三冊目の二つ折り本が出た。モンボドは1799年の死に至るまでなお『言語の起源と進歩について』に取り組んでいたのであるから、本論文では、以前の目録に収録されていない著作の場合には、常に1807年目録に言及している。⁽²³⁾

これらの目録は、モンボドによって参考にされたこの図書館の著作の名を挙げた後で、CAL 1742, 1776, 1787, 1809のように明記される。パリの王立図書館で読まれた著作は、別に一覧表にしてある。モンボドが利用しているが、弁護士図書館には収蔵されていないことが明らかな他の著作の短い一覧表も作成している。その内の幾つかは、モンボドが所有していたと推定して良いだろう。

『言語の起源と進歩について』が弁護士図書館の所蔵書と密接な関係のあることを示すことは出来るが、関係の中身は、決して単純ではない。第一に、モンボドによって利用された著作が目録にないからと言って、それが彼の利用した図書館に存在していなかったということにはならないのである。時には、失われた著作が、後の目録に現れることもあった。しかし、そういうことが頻繁に起こるわけではない。⁽²⁴⁾

第二に、モンボドは、保管者に様々な本を推薦している。そこで、1776年、1787年目録に収録されているからと言って、必ずしも、モンボドがそれを借りたとか、図書館で読んだということにはならないのである。しかし、モンボドが推薦する前にそれらの著作を読む機会があったと考えられる場合も、それ程あるわけではない。彼自身の蔵書が限られたものであったことは確かである。いずれにせよ、ヒューム、ケイムズ Kames, ファーガスンと同様に、彼はせっせと図書館から借り出したのであった。そして、モンボドの読んだものと図書館の所蔵書との間には、極めて著しい程度の

²² 同上。

²³ 上記ディクソン、174頁。

²⁴ この情報は、スコットランド国立図書館のパトリック・キャデル Patrick Cadell 氏によるものである。

対応が存在する。⁽²⁵⁾

第三に、そして最後に、モンボドは、1763, 1764, 1765年の三回のフランス訪問の間に、ある程度の初期の素材を手に入れていた。これらの訪問の間に、彼は王立図書館から何冊かの本を借り出しており、それらの本が『言語の起源と進歩について』の創まりにとって決定的だったのである。⁽²⁶⁾

3. モンボド文書と『言語の起源と進歩について』

スコットランド国立図書館のモンボド文書の主要な収集文書は、18世紀のスコットランド哲学者に関係した所蔵文書のうちで最も広範なものの一つである。収集文書は、法律関係文書以外に、手紙、ノート、300を越える番号を打たれた手稿である。⁽²⁷⁾

少数の極めて早い時期の手稿を別にすれば、モンボド文書は、大雑把に二つの時期に分けられよう。1765年、これはモンボドが『言語の起源と進歩について』に取り掛かった時であるが、この年以前の十年間くらいの間に書かれたことが明らかなもの、そして、彼がその未完の著作六巻を書き進めた、三十四年の長い時期に属するものとである。初期の文書の多くは、

②⑤ モンボド文書の保管箱 21 は、バーネット家文書を収めている。その中には、1830年代に、モンボド家が売却した書籍の一覧を記したノートがある。不幸にして、書籍の記述は曖昧で、役に立たないが、モンボド自身の蔵書が限られたものであったことは、それでもはっきり分かる。勿論、それらの書籍が売却されたのは、もっと早い時期であった可能性はある。しかし、弁護士として、モンボドは1737年から弁護士図書館を利用することが出来た(クロイド Cloyd, 12頁を見よ)。

②⑥ 本論文第 XIV 章を見よ。

②⑦ クロイド (180-1頁) は、モンボドに関係する諸草稿の他の資料を挙げている。また、次のものも見よ。ウィリアム・フレイザー William Fraser 「キンカーディンシャ州モンボドにおけるモンボド卿関係草稿」 “The Manuscripts Relating to Lord Monboddo at Monboddo in Kincardineshire”, 『歴史草稿に関する勅許委員会第四報告』 *Fourth Report of the Royal Commission on Historical Manuscripts*, 第 I 部 (H. M. S. O., ロンドン, 1874 年), 及び, 同じ著者の 「モンボド卿の草稿に関する第二報告」 “Second Report on the Manuscripts of Lord Monboddo”, 『歴史草稿に関する勅許委員会第六報告』 第 I 部 (H. M. S. O., ロンドン, 1877 年)。

装丁二つ折り本の形になっている。それらはしばしば、言語と社会の研究との関係を示す、スコットランド法制の様々な側面を扱っている。例えば、修辞学、統治の起源、人々の移民と異なった言語の間関係である。スコットランド法制における形而上学、哲学、歴史、特に人間と言語と社会の歴史、の重要性を説明するものもある。そこではアリストテレス、キケロ、ストア学派が古典の影響としては中心的である。⁽²⁸⁾

初期の文書の中には、特に「言語に関する論考」“A Discourse on Language”のように、セレクト協会 Select Society における論戦と関連すると思われるものもある。この文学協会は、モンボドも指導的会員の一人であり、スコットランド啓蒙運動の発展において重要な役割を演じたのであった。文書の大部分は、他のスコットランドの哲学者たち、特にアダム・スミスを捉えていた諸主題を扱っているが、スミスは、発展の種子をまく人物であり、やはり法学の研究に深く影響された思想を持った、セレクト協会の同志会員であった。⁽²⁹⁾

第二のまとまりを成す（つまり 1765 年以降の）文書は、セレクト協会の消滅後に書かれたもので、ダグラス訴訟事件 Douglas Cause のためのモンボドの最後のパリ訪問直後に始められた。この訪問は 1765 年のことで、これが『言語の起源と進歩について』の創まりにとって決定的に重要なものとなった。それらの文書の主体は、『言語の起源と進歩について』のためのモンボドの広範な読書からのノート、最終的には何らかの形で『言語の起源と進歩について』に組み込まれた諸試論、『言語の起源と進歩について』の諸章の草稿である。1770 年代後期、1780 年代、1790 年代に属するノートもあるが、それらはモンボドの別の著作『古代形而上学』*Antient Metaphysics*（全 6 巻、1779–99）に主として関係している。⁽³⁰⁾

モンボド文書の大部分は、『言語の起源と進歩について』の中に反映していることが見て取れるだろう。しかし、モンボドは、しばしば殆ど同じ言葉を用いて、繰り返し同じ主題に戻っているのもので、特定の文書を本文の特

⁽²⁸⁾ 本論文第 XIV 章を見よ。

⁽²⁹⁾ 本論文第 VI, VII, IX, XIV 章を見よ。

⁽³⁰⁾ 本論文第 XIV 章を見よ。

定部分に関係付けるのは、困難である場合が多い。そして、一般的には、そのようなことは試みていない。他方、文書は殆ど例外なく日付が付されている。そこで、日付の無いものの時期を推定することを試みている。

モンボド文書の偏執的特質は、否定し難いものがある。モンボドの思考には、進展の表れが殆どない。確かに、モンボドは、古代哲学に、特にアリストテレス的質料形相論に固執していた。そのために、彼の著作は、非常に長い間低く評価されたのである。他方、この固執は全く驚くべきことである訳ではない。アリストテレス主義は、確かに、総括的であることを主張していた。法律家は、どんな場合にも保守的な見解を抱く傾向がある。そして、文書の比較的初期のものを書いた時までには、モンボドは既に中年であった。つまり、1765年には、彼は五十一歳だったのである。その上、モンボドは、人文主義者で、哲学的、文化的用語において、16世紀へと時計を戻したいと思っていたのである。彼はまた、首尾一貫した、体系的思想家であって、人間の知的発達を歴史を跡付けるために、未開諸言語に関連して集めた証拠の集成の総体を説明したいと思っていた。

こうして、ケンブリッジ・プラトニズムの影響にもかかわらず、モンボド文書は、公刊された『言語の起源と進歩について』のテキストと同様に、アリストテレス的合理主義のひたむきな擁護となっているのである。文書と公刊書の双方において、文体と議論には、法廷弁論的特質が見られる。モンボドの主題は、基本的には方法と言語である。そして、『言語の起源と進歩について』は、彼が擁護している類 *genera* と種 *species* の技法の体系性を明らかに示している。

4. 本論文各章の概略

第II章は、モンボドの生涯を略述するが、その際、彼の人文主義的背景に重点を置くと共に、一般的な形で、スコットランド啓蒙運動の基礎にあり、『言語の起源と進歩について』に表現されている人文主義的諸原理を論じる。

第III章は、この人文主義的伝統とスコットランド法学との間の関係と、それらの結合がスコットランド文化に対して持つ重要性を指摘する。この章ではまた、17世紀後半の人文主義の復活と啓蒙運動の双方における、弁

護士たちと弁護士図書館の役割を手短に検討する。より限定して言えば、スコットランド法学、弁護士図書館、モンボドその人に影響を与えた、16世紀の法学のフランス学派の諸原則を扱う。

第IV章は、18世紀スコットランドの言語学的、文化的、哲学的諸問題を略述する。モンボドは、それらの問題をスコットランド人文主義の衰退の結果であるとして見ており、『言語の起源と進歩について』において、そのディレンマの解決策を提出したのである。

そこで、スコットランド啓蒙運動の二つの主要な知的側面、つまり、ロック的「人間の科学」、即ちイギリス道徳経験主義者の哲学と、キケロ的修辞学との二つとの関係において、『言語の起源と進歩について』を検討する必要があるだろう。その二つの関係は、それぞれ第V章と第VI章で扱われる。両関係とも、言語に基づく真の人間科学の確立に関わっている。そして、モンボドは、両者をその本来のルネッサンス的原則に戻そうとしたのであった。

第VII章は、二つの文学協会、即ちセレクト協会とグラスゴウ文学協会というより狭い文脈において、『言語の起源と進歩について』を検討する。これらの文学クラブは、修辞学の礼賛、英語の改善、そして、グラスゴウ協会の場合には、ギリシアの復興と密接に結び付いていた。『言語の起源と進歩について』は、スコットランド啓蒙運動のこれらの側面の三つすべてに、重要な貢献をしたと言えるだろう。セレクト協会はその揺籃期にあったと見なして良いだろう。同じ第VII章では、スコットランド啓蒙運動の初期の頃のグラスゴウのギリシア文明崇拝者たちの役割と、彼らの関心とモンボドの関心との間の類似点が検討される。

『言語の起源と進歩について』のより一般的な知的背景と、それを反映した文化クラブの働きを扱った後、われわれは、「人間の科学」と修辞学の礼賛とに密接に結び付いた論戦へと向かう。つまり、言語の起源と進歩に関する論戦である。『言語の起源と進歩について』第I巻は、この論戦へのイギリスの貢献の際立ったものと見なして良いだろうし、また、その貢献の成されたジャンル、即ち哲学的歴史のジャンルの最も顕著な例の一つと見なして良いだろう。

第VIII章は、主としてロックとマンドヴィル Mandeville に言及しつ

つ、この論戦の背景を扱う。彼らの理論に反対することに、『言語の起源と進歩について』は向けられていたのである。

そこで、われわれは、モンボドの主要な源泉を論じることになる。第一に、フランスの源泉が扱われる。『百科全書』*Encyclopédie* (第 IX 章)、ルソーの第二『論文』*Discours* (第 X 章)、ビュフォンの『自然史』*Histoire Naturelle* (第 XI 章) である。これら三つとも、スコットランド啓蒙運動にとって特に重要であった。実際、『言語の起源と進歩について』の背景にいる主要人物であるアダム・スミスは、それらの著作を大きい望みを抱いているスコットランドの作家たちに薦めた。⁽³¹⁾ モンボドに関する限り、『百科全書』についての章は恐らく、背景的章としての性質をより色濃く持っているものであろう。しかしだからと言って、重要性が少ない訳ではなく、ビュフォンやルソーと同じ考えに立つものであることは明らかである。というのも、ビュフォンとルソーとも、『百科全書』の主要な寄稿者であったからだ。

第 XII 章は、モンボドのスコットランドに関係する重要な唯一の源泉を扱う。それは、アダム・スミスの『諸言語の最初の形成 [および本源的ならびに複合的諸言語の特質の違い] についての諸考察』*Considerations concerning the First Formation of Languages* である。スミス自身は、ルソーの第二論文と、『百科全書』の言語に関する諸論説とに多くのものを負っていた。⁽³²⁾

それから、第 XIII 章は、モンボドの一つの主要なイギリスの源泉であるジェイムズ・ハリス James Harris の哲学的文法『ヘルメス』*Hermes* との関係において、『言語の起源と進歩について』を検討する。モンボドは、自分の『言語の起源と進歩について』をハリスの『ヘルメス』を補足するものと見なしていた。だから、この章は特別な重要性を持っている。そこにおける中心的追究課題は、ケンブリッジ・プラトニズムとアリストテレス的文法である。

『言語の起源と進歩について』の背景と諸源泉を扱い終えたので、モンボ

(31) 本論文第 IX 章を見よ。

(32) 本論文第 IX, XII 章を見よ。

ドの著作の創まりが最終的に第XIV章で跡付けられる。この章は、殆ど完全に、モンボド文書の証拠に基づいて、1776年までの『言語の起源と進歩について』の展開の跡が追跡される。つまり、この章では、1799年のモンボドの死の至るまで書き続けられた長い過程の跡をたどろうとするのではなく、『言語の起源と進歩について』の決定的に重要な初期の諸段階を集中的に検討するのである。

モンボドが『言語の起源と進歩について』を書いている間に参考にした著作の一覧表は、この論文の不可欠の部分である。それらの著作は、古典文献、旅行文献、言語、歴史、法、その他、という六つの項目の下に掲げられているが、それは、モンボドにとっての、古典の源泉と16世紀から続けて出版された旅行記の重要性を浮かび上がらせるためである。モンボドの源泉のこの二重の性質は、彼の目的の一つ、即ち古代と当代の人間の諸科学を調和させること、を反映していると言えるかも知れない。しかし、古典的源泉の項目の下に、幾つかの法律関係、文法関係、旅行記関係の本が現れることは、避けられないことである。

第 II 章 モンボド卿の生涯と人文主義的背景

1. 家族的背景

モンボドのバーネット家は、アバディーンシャー州のレイズ Leys のバーネット家の分家であったが、多くの成功した聖職者と弁護士を出してきた旧家で、その人たちはしばしば文学的あるいは哲学的性向を示していた。そのような地主の家は、現状を維持することに関心を抱き、法律関係の職業と古くから関係をもっていたものである。⁽¹⁾

そのような家の大多数と同様に、特にスコットランドの北東部にあって、バーネット家は英国国教会会員 Episcopalian で、ジャコバイト Jacobite であった。英国国教会会員は、通常ジャコバイトで（しばしば、モンボドのように、フリーメーソン団会員でも）あった。彼らのイングランドと大陸との結び付きは、17世紀の宗教的騒動の間のスコットランド文化にとっては、最大の重要性を持っていた。彼らは、スコットランドを新しい思想の潮流と接触させ続けたのである。例えば、ケムネイのトマス・バーネット Thomas Burnet of Kemnay は、ライプニッツ Leibniz と文通していたが、ライプニッツはダルガルノ Dalgarno の哲学的言語を含む、様々な主題についての手紙を書き送っている。その一方で、トマス・バーネット卿 Sir Thomas Burnet は、チャールズ II 世付きの医師で、ロバート・シバルド卿 Sir Robert Sibbald の友人だったが、シバルド、ピトケアン Pitcairne、デイヴィッド・クレゴリー David Gregory と同じように、新しい哲学を海の向こうから持ち帰ったスコットランド人の一人であった。⁽²⁾

(1) クロイド, 1 頁。ジョージ・バーネット George Burnett『レイズのバーネット家』*The Family of Burnet of Leys* (New Spaulding Club, アバディーン, 1901 年) を見よ。

(2) 同上書。トマス・バーネット卿, ロバート・シバルド卿 (1641–1722), アーチボルド・ピトケアン Archibald Pitcairne (1652–1713), デイヴィッド・グレゴリー (1691–1708) については, DNB を見よ。ケムネイのバーネットについては, ドゥーガルド・ステュアート Dugald Stewart『著作集』*Works* (Edinburgh, 1854–60 年) 第 I 巻, 604 頁を見よ。

英国国教会会員はまた、長老派主義 Presbyterianism の教条的狭量と対照的な古い、先験的な、人文主義的文化とも密接な関係を持っていた。宗教改革後の主教団と長老会との妥協のせいで、この英国国教会的文化は、まだ 18 世紀にはスコットランドの北東部では影響力を維持していたのである。⁽³⁾

北東地方の英国国教会の家族は、ローマ・カトリックとの関係さえ持っていることがよくあった。例えば、トマス・イネス Thomas Innes (1662-1744) は、歴史家で好古家だったが、パリで、ナヴァール大学 College of Navarre とスコットランド人大学 Scots College に通った。彼の兄、スコットランド人大学の校長は、スコットランド啓蒙運動の初期の発展に重大な役割を演じたのであった。⁽⁴⁾

17 世紀の宗教的混乱の間、英国国教会会員たちは亡命することが多かった。時には、グラスゴウの大監督 Archbishop のアレクサンダー・バーネット Alexander Burnet (1614-1684) のように、イングランド教会の中で聖職につくこともあった。歴史家で、王立協会会員ギルバート・バーネット Gilbert Burnet F. R. S. (1643-1715) は、トマス・バーネット卿の兄弟だが、ソールズベリー主教 Bishop of Salisbury になった。⁽⁵⁾

ギルバート・バーネットは、モンボドの血縁者の一人だった。モンボドとギルバート・バーネットの家族の人々との間には、背景的にも、関心事や経歴においても、類似する点が幾つもある。⁽⁶⁾

ギルバートの父は、モンボドのように、民事高等裁判官であった。ギルバート自身は、アバディーンキングズ・カレッジ King's College でギリシア語に抜群の成績を収め、ケンブリッジ・プラトニストたちの友と

ダグラス・ダンカン Douglas Duncan『トマス・ラディマン』*Thomas Ruddiman* (Edinburgh, 1965 年) 16-22 頁には、英国国教会会員の方向感覚の実例となるようなピトケアンに関する興味ある情報がある。特に、ゲール語を含む言語への関心に注目せよ。

(3) ダンカン、同上書、21 頁。

(4) *Dictionary of National Biography* (=DNB).

(5) 同上書。

(6) クロイド、4 頁。

なった。息子の一人、王立協会会員トマス・バーネット Thomas Burnet F. R. S. (1694–1753) は、オランダに留学し、ロンドンで判事となったが、モンボドと極めて似通った、ロックや古代人に関する見解を抱いていた。彼の多くの刊行書のうちの二つのものの題を見れば、自ずとそれが分かる。『わが先祖たちは我々と同じく賢明なり：または、現代の事実の古代における先例』*Our Ancestors as Wise as We: or Ancient precedents for modern facts* (1712) と『亡恩の歴史』*The History of Ingratitude* (1714) である。⁽⁷⁾ もう一人の息子、この人もギルバートだが、モンボドのように、ハチソン Hutcheson の「道徳感覚」に対する合理主義的批判者であった。ハチソンの「道徳感覚」は、18世紀に流行したスコットランド常識 Common Sense 哲学の基礎となったものである。⁽⁸⁾ すべてのこれらの傾向は、そのような英国国教会会員の家庭の伝統的な人文主義的背景と関連付けることが出来るものである。モンボドの受けた教育は、その型の事例となる。

2. 教 育

モンボドは、キンカーディンシャ州、モンボドの近くのローレンスカーク Laurencekirk にある教区学校に通った。そこは、バーネット家の人々に良く知られていたトマス・ラディマン (1674–1757) が前世紀の終わり近くまで教えていたところであった。ラディマンは、数ある中でも、印刷業者、文法家、ラテン語学者、弁護士協会の書記代理 Clerk Depute, 弁護士図書館の保管者で、1732年には、モンボドに法律の個人教授をもした可能性がある。ピトケアンとシバルドの友人でもあったラディマンは、その伝統が衰退しつつあった18世紀初期における、スコットランドの人文主義的伝統の傑出した代表者であった。⁽⁹⁾

(7) DNB.

(8) 同上書。

(9) ダンカン、同上書。人文主義の一般的衰退にもかかわらず、国教会的でジャコバイト的影響は、18世紀初期には紳士階級と専門家階級の間では強力であった。それは、彼らを世紀半ばの長老派穏和主義の台頭までは、自由主義思想と提携させたのであった。(同上書、21頁。)

家庭で個人教授によって古代の人々に対する最高の尊敬の念を植え付けられた後で、モンボドは、1728年から1732年まで、アバディーンのカレッジ・カレッジ（ラディマンの母校）に通った。そこでの彼の指導教授たちは、責任を負っている他のどの科目よりもギリシア語に堪能であったように思われる。もう一つのアバディーンにあった大学、マリシャル Marischal とは違って、キングズ・カレッジは、17世紀終わりまで古い英国国教会的人文主義文化の精神の幾分かを保持し続けてきていた。そして、次の世紀を通じてずっと、二つの大学のうちではより伝統的であり続けた。⁽¹⁰⁾

しかし、モンボドはまた、マリシャル・カレッジの学長、息子のトマス・ブラックウェル Thomas Blackwell the younger の講義にも出席した。ブラックウェルは、北東地方のギリシア「復興」の指導者であり、流行のシャフツベリ Shaftesbury のヘレニズムの信奉者であった。彼は、モンボドがローマ世界のうちギリシアに起源を持つものや歴史的な方法的態度一般に対する関心を育て上げるのを助けたと思われる。こうした関心は、モンボドの人文主義的見地をラディマンのそれと区別するものである。⁽¹¹⁾ (しかし、それらの関心は、また、スコットランドの法学が元来はそこから出てきたフランスの歴史的＝文献学的法学の人文主義学派の特徴でもあった。そして、そこにこそ、弁護士図書館の創設者、ジョージ・マッケンジー卿が、後の時期にモンボド自身がそうしたように、戻りたいと思ったのであり、それは、スコットランド人文主義の最古の伝統を保持するためであった。)⁽¹²⁾

1733年から1735年まで、モンボドはオランダで——グロウニンゲンと多分ライデンでも、ローマ法を研究した。そこは、宗教改革以後スコットランドの法学徒が研究してきた場所であった。⁽¹³⁾ 恐らくは、この時にはモ

(10) クロイド, 6頁。

(11) オクタタイアのジョン・ラムゼイ John Ramsay of Ochertyre 『18世紀のスコットランドとスコットランド人』 *Scotland and Scotsman in Eighteenth Century*, A. アラーディス Allardyce 編, 2巻 (Edinburgh 及び London, 1888年), 291-4頁, 351頁。

(12) 本論文第III章を見よ。

(13) クロイド, 6-7頁。

ンボドは、正しいギリシア語の規範の確立をめざしていたティベリウス・ヘムステルホイス Tiberius Hemsterhuys (1685–1766) の影響を受けるようになっていたと思われる。モンボド文書の中の最も初期のものの一つが示すように、彼が既に言語一般に興味を抱いていたことは、明らかである。⁽¹⁴⁾

- (14) モンボドのギリシア語の体系は、ヘムステルホイスのものと良く似ていた。但し、モンボドは影響を否定した。『言語の起源と進歩について』第II巻、541–2頁と本論文第VII章第5節も見よ。

ヘムステルホイスとモンボドの体系の間の類似性については、エドワード・スタンキエヴィッツ Edward Stankiewicz 「18, 19世紀言語学における動詞への讃歌」 “The Dithyramb to the Verb in Eighteenth and Nineteenth Century Linguistics”, 『言語学史の研究：伝統と範型』 *Studies in the History of Linguistics: Traditions and Paradigms*, デル・ハイムズ Dell Hymes 編 (Bloomington 及び London, 1974年) 168–70頁を見よ。

同じ考えがヘルダー Herder によって表明された。ヘルダーは、『言語の起源と進歩について』のドイツ語訳, *Werk von dem Ursprunge und Fortgange der Sprache*, E. A. シュミット Schmid 訳 (Riga, 1785年) に序論を書いた。オランダのギリシア学者全般については J. G. ゲレツェン Gerretzen 『ヘムステルホイスト学派』 *Schola hemsterhusiana* (Utrecht, 1940年) を見よ。

モンボドの論文に、「中国語について」と題されたものがあり、(モンボド文書 250), 「50年程前にオランダで書かれた。1785年」と書き込まれている。それは確かに漢字と単音節音を簡単に論じているが、調音, アルファベット, 言語の起源も扱っている (ホラティウスの『風刺詩』 *Satires* I, iii, 100–4 からの詩行が引用されている。この作品からは、『言語の起源と進歩について』の第I, II巻頭の銘句が取られた)。とりわけ、彼が論じているのは、語と観念の関係で、これは、抽象能力を中心に据えて、『言語の起源と進歩について』において彼が熱中することになるものであった。つまり、彼は既に、精神の表現としての言語に関心を持っていたのである。その論文のほぼ半分は、語類を取り扱う。語類は、諸精神作用に基づいているのだが、語類がそれらの精神作用の表現になっていると考えられるのである。

第一次的な影響は、ポール・ロワイヤル文法とロックの『人間知性論』第3巻であるように見える。彼はまた、二つの英語文法に言及する——多分ベン・ジョンソン Ben Jonson の『英文法』 *English Grammar* (1640) と『ロイヤル文法再構』 *The Royal Grammar Reformed* (1695) であろう。

3. ロンドンでの生活と法曹関係の経歴

1745年の暴動の間、モンボドはロンドンに行き、幾人かの文学関係と政治関係の人物に会った。恐らく、ケンブリッジ・プラトニストでシャフツベリの甥であるジェイムズ・ハリスにも会ったであろう。ハリスは、『ヘルメス』の著者であったが、この著作は、『言語の起源と進歩について』に深い影響を及ぼした哲学的文法である。モンボドは、生涯を通じて、規則的に間隔をおいてロンドンを訪れることになった。最終的には、彼はこの首都における文学的名士になったのであった。⁽¹⁵⁾

1746年、スコットランドに戻った後、モンボドの経歴は、華麗なものとなった。その上に、彼は弁護士図書館の管理者の一人となり、スコットランド啓蒙運動の最も影響力があり値打ちの高まっている協会、つまりセレクト協会の設立会員になった。この二つの事柄が両方とも、『言語の起源と進歩について』の創まりにとって重要な結末をもたらしたのである。⁽¹⁶⁾

モンボドの法曹経歴の頂点は、多分有名なダグラス訴訟事件における彼の決定的役割であっただろう。ダグラス家は彼自身も親縁関係にある家族であった。1763年と1765年の間に、彼は依頼人のためにパリを数回訪問したが、この訪問が『言語の起源と進歩について』の創まりに決定的に重要なものとなったのである。彼は二人の文学関係の人物に会い（一人は百科全書学派である）、王の陳列室 Cabinet du Roiを訪れ——これはbuffonが『自然史』で記述し、有名な剥製の「オラン・ウータン」を収めていた——、「野生の少女」に面接し、王立図書館から、彼に『言語の起源と進歩について』を企てさせることになった書籍を借り出した。1767年、『言語の起源と進歩について』を書き始めて二年程経ってから、彼は、モンボド卿 Lord Monboddooの称号を得て、民事控訴院 Court of Sessionの判事となった。⁽¹⁷⁾

(15) クロイド、13-14頁

(16) クロイド、16-19頁。彼は、1760年にはキンカーディンの州長官 Sheriff になった（同上書、2頁）。

(17) ダグラス訴訟事件については、クロイド、23-24頁を見よ。また、モンボド文書、保管箱19も見よ。モンボドのパリ訪問については、クロイド、22、25-8頁を見よ。オラン・ウータンについては、クロイド、161-8頁と本論文の第X、XI章を見よ。

4. 文学的経歴

モンボドの偉大な著作、『言語の起源と進歩について』は、彼の死まで彼の心を占めることになったのだが、未完に終わった。最初の三巻は二版が出るまでに至ったのだが、この著作は一般的には、批評家、特にスコットランド人に、余り正当に迎えられなかった。その哲学的見解は、流行遅れで、その人類学的データ、特にオラン・ウータンに関するものは、嘲笑を引き起こしたのであった。⁽¹⁸⁾

(18) クロイド, 42-54 頁。

第I巻(1773)の第二版は、1774年(第II巻が出版された年)に現れた。第II巻の第二版は、1809年まで出なかった。第III巻(1776)の第二版は、1786年に現れた。

『言語の起源と進歩について』第II, III巻に対する『エディンバラ雑誌と評論』*Edinburgh Magazine and Review*における攻撃については、クロイド, 53-6頁を見よ。『言語の起源と進歩について』の書評の一覧については、A. C. アルストン Alston『英語の文献目録』*A Bibliography of the English Language*, 第I巻(1965年)を見よ。

ヘルダーは、しかし、『言語の起源と進歩について』のドイツ語縮約本への序論を書いているが、モンボドを高く評価し、正確にも、内容のない書評を、モンボドのロック的形而上学と流行の美文学の拒否から生じた文学的陰謀のせいであるとしている。

ヘルダーは、ハリスとモンボドの諸原則を賞賛し、『言語の起源と進歩について』を好意的にケイムズの『人間の歴史素描』*Sketches of the History of Man*と比較しているが、彼はケイムズのものは無原則的な事実の集積であるとしている。彼は、観念の形成についてモンボドの言うことに賛成しているし、諸言語の比較についての彼の研究は、ずっと一人の達人による予備的研究として残るだろうと言い、また、言語の起源と進歩の主題については、彼自身もそれより前に書いていたのだが、「勝利のしゅろの葉を彼に与える」と書いている。

にも拘らず、ヘルダーは、モンボドが旅行者の話を轻信して用いていると批判する。オラン・ウータンは人間ではないし、言語を持たない人間がいたためしはないという。また彼は、言語が発明されたものであることを信じない。E. A. シュミット訳へのJ. G. フォン・ヘルダーの序文『言語と起源と進歩に関するモンボド卿の著作について』*Des Lord Monboddo Werk von dem Ursprunge und Fortgange der Sprache* (Riga, 1785年)を見よ。また、ポール・ザルモン

モンボドの別の著作、『古代形而上学』(1779-99)は、やはり六巻から成り、同様な諸主題をより厳密に哲学的観点から扱ったものであるが、更に一層冷ややかな批評に会ったのである。にも拘らず、モンボドは、ロンドンの社交界で一種の名士になり、生涯の後期には、オックスフォードに信奉者が出現した。⁽¹⁹⁾

スコットランドにおいては、モンボドの奇抜さと古代哲学へのひたむきな熱中が既に、『言語の起源と進歩について』を嘲笑のキャンペーンの哀れな対象としていたのであったが、『古代形而上学』は殆ど完全に無視された。モンボドが予想した通りであった。しかし『古代形而上学』は、『言語の起源と進歩について』と同様に、極めてスコットランド的な企てであった。モンボドは、新しい科学の妥当性を認識していたが、ニュートン物理学に、古代哲学と啓示宗教と矛盾しない形而上学的な基盤を与えたいと思ったのである。そこで、彼の目的は、ニュートンのいう流率 fluxions を古代幾何学の基礎の上に置こうとするコリン・マクローリン Colin MacLaurin の関心と比較できると思われる。⁽²⁰⁾

そのような訳で、皮肉なことに、モンボドこそが、スコットランド啓蒙運動の基礎に横たわり、それに特有の性格を与えるのに力を持った、スコットランド文化の伝統的人文主義の諸原則に忠実であり続けたのである。そして、モンボドこそが、ロックのいわゆる「新しい論理学」が実は論理学の体系でも何でもないことを見て取ったのである。彼の立場は、より後の学識あるアリストテレス主義者でリード Reid の著作集の編者、ウィリアム・ハミルトン卿 Sir William Hamilton のそれに比較出来るかも知れない。ただし、ハミルトンは、後にアリストテレスの論理学から前に出る道を示すことにもなったのであるが。⁽²¹⁾

Paul Salmon 「ヘルダーの言語と起源についての論考と動物界における人間の位置」“Herder's Essay on the Origin of Language, and the Place of Man in the Animal Kingdom”, 『ドイツの生活と文学』新シリーズ, 第22巻(1968-9)を見よ。

(19) クロイド, 98-9頁。

(20) 同上書, 99頁。コリン・マクローリン『流率論』*A Treatise of Fluxions*, 2巻(Edinburgh, 1742年)を見よ。

(21) ウィリアムとマーサ・ニール William & Martha Kneale『論理学の発展』*The Development of Logic* (Oxford, 1962年) 312-3, 352頁以下を見よ。

5. 友人と文通相手

モンボドの多くの友人と文通相手には、幾人かの有名な言語学者、文法家、文献学者が含まれていた。グリム・ソークリン Grim Thorkelin, 『ベーオウルフ』 *Beowulf* の最初の編者（モンボドは、彼とアイスランド語とグリーンランドの言語について論じ合った）。ウィリアム・ジョーンズ卿 Sir William Jones, 彼とはサンスクリット語と、インドの諸技能の源泉としてのエジプトについて文通した。チャールズ・ウィルキンズ卿 Sir Charles Wilkins, ギリシア語とサンスクリット語の権威。そして、ジョン・ヤング John Young, グラスゴウのギリシア語教授。更にこのグループには、ラテン語学者、ジョン・ハンター John Hunter を含めて良いだろう。モンボドの書記として、ハンターは、『言語の起源と進歩について』第I巻刊行の準備を手伝った。後に彼は、セント・アンドルーズのラテン文学教授 Professor of Humanity となり、ラディマンのラテン文法と『ブリタニカ百科事典』の双方に重要な付加記述を寄稿した。ブリタニカの場合には、ハンターは、引き続く『ブリタニカ百科事典』の諸版を通じて、次の世紀までずっと、モンボドの諸見解を普及する役を果たしたのであった。⁽²²⁾

22 クロイドを見よ、ソークリン (1752-1829) については、135, 181 頁。ウィリアム・ジョーンズ卿 (1746-94) については、88, 99, 136, 158, 184 頁。チャールズ・ウィルキンズ卿 (1749?-1836) については、88, 158 頁。ジョン・ヤング (1750?-1820) については、130, 181 頁。ジョン・ハンター (1747-1837) については、40, 100 頁。また、クロイド「モンボド卿、ウィリアム・ジョーンズ卿、サンスクリット語」"Lord Monboddo, Sir William Jones and Sanskrit", 『アメリカ人類学者誌』 *American Anthropologist*, LXXI (1969年12月) 1134-5 頁も見よ。

イアン・マイケル Ian Michael は、『ブリタニカ百科事典』の始めの二つの版 (1768-1771 年と 1777-1784 年) の「文法」の項は、専らジェイムズ・ハリスを基にしているが、第3版 (1788-1797 年) は、言語の起源をより多く扱っていることを指摘している。(マイケル『英語の文法範疇』 *English Grammatical Categories* [Cambridge 1970 年] 179 頁)。モンボドの友人、ウィリアム・スメリー William Smellie (1740-95) が元もとの編集者で、初版の項目の大部分を書いたのである。

しかし、モンボドは、友人として他の多くの分野の有名な人々を数えることが出来た。例えば、ジョセフ・バンクス卿 Sir Joseph Banks は、王立協会の会長であり(彼とは自然史に関して文通した)、ジョージ・ベーカー卿 Sir George Baker は、王立医科大学 Royal College of Physicians の学長であり、トマス・バージェス Thomas Burgess は、オクスフォードのコーパス・クリスティ・カレッジ Corpus Christi College の評議員で、後のソールズベリー大主教であり(彼とは文献学的、哲学的問題について文通した)、ジョージ・アイザック・ハンティンフォード George Isaac Huntingford は、オクスフォードのニュー・カレッジ New College の評議員であるし、経済学者のリチャード・プライス Richard Price がおり、ウェルボア・エリス Welbore Ellis は、海軍本部委員 Lord

第3版の項は、『言語の起源と進歩について』に多くを負うているように思われる。

この項目は、次の世紀も遅くなって第9版の出現まで、書き換えられなかった。但し、第7, 8版には動詞の理論についてのハンターによる二つの付加がある。

第7版(1842年の第X巻, 640頁)によると、この項目全体としては、ハンターがセント・アンドルーズのラテン文学教授として、普遍文法について講義した際(1775-1835)提出した諸原則を表すという。ハンターがモンボドの秘書を勤め、モンボドが書いたものから『言語の起源と進歩について』の第I巻をまとめるといふ名誉を持っていたのであるから、ハンターが普遍文法について言うべきと考えたことがモンボドの見解と似ていても驚くべきことではない。

ハンターは、1784年6月、エディンバラ王立協会で論文を読んだ。「幾つかの接続詞の本性、意味、効果に関する文法的試論、特にギリシア語 ΔE 」“A Grammatical Essay on the Nature, Import and Effect of certain Conjunctions; particularly the Greek ΔE ” (『エディンバラ王立協会紀要』TRSE, I[1788年] II部, ii, 113-34頁)である。彼はまた、ラディマン原著の影響の大きかった『ラテン語の基礎』*Rudiments of the Latin Tongue*の第22版を編集した(1820年)が、これには、普遍文法への寄与を目指したという「ギリシア語とラテン語の動詞の法と時制」に関する長い、論理的な研究論文が付けられていた。1826年までに、この本は更に四版を重ねた(DNBによる)。G. E. デイヴィ Davie『民主的知性』*The Democratic Intellect* (1961年)は、このことを、基本的諸原則の哲学的議論に対するスコットランド人の強い好みの例として挙げている。

of the Admiralty で、アメリカ相 Secretary for America であり、後のメルヴィル子爵 Viscount Melville のヘンリー・ダundas Henry Dundas がいたし、サーロウ卿 Lord Thurlow がおり、ドゥーガルド・ステュアート Dugald Stewart は、エディンバラの数学教授であり、サミュエル・ホーズリー Samuel Horsley は、聖デイヴィッドとロチェスターの主教で、ニュートンの著作の編者であった。⁽²³⁾

23 クロイドを見よ、ジョセフ・バンクス卿 (1743-1820) については、98, 103-4, 181 頁。ジョージ・ベイカー卿 (1722-1809) については、98, 104, 128, 157 頁。トマス・バージェス (1722-1809) については、103 頁。ジョージ・アイザック・ハンティンフォード (1748-1832) については、93-4 頁。リチャード・プライス (1723-91) については、98, 100-1 頁。ウェルボア・エリス、初代メンディップ男爵 1st Baron Mendip (1713-1802) については、14, 98 頁。ヘンリー・ダundas (1742-1811) については、16, 24, 156-8 頁。エドワード・サーロウ (1731-1806) については、136, 157-8 頁。ドゥーガルド・ステュアート (1753-1828) については、100-2 頁。サミュエル・ホーズリー (1733-1806) については、98-103 頁。

多くの他の名前をこれに付け加えることが出来よう。例えば、医学博士ジョン・プリングル卿 Sir John Pringle M. D. (1707-82) は、王立協会の会長、ジョン・ハウプ John Hope (1725-1786) は、エディンバラの植物と薬物教授で、王立植物園長官であった。ウィリアム・ナイト William Knight 『モンボド卿と同時代人数名』 *Lord Monboddo and Some of his Contemporaries* (London, 1900 年) には、これらの人々の大多数からの手紙が印刷されている。しかし、モンボド文書の原本と比較すると分かるように、多くの間違いと省略がある。モンボド文書の保管箱 22 は、127 通の手紙を収めている。

クロイドは、手紙の資料源として他に、「ビーティ書簡」(アバディーンのキングズ・カレッジ) と「グリム・ソークリン書簡」(エディンバラ大学) を挙げている。クロイド、180-1 頁を見よ。

リトルトン卿 Lord Lyttleton (1709-1772) と交わした書簡の一部は、ロウズ・メアリー・デイヴィス Rose Mary Davis 『善きリトルトン卿』 *The Good Lord Lyttleton* (Bethlehem, Pennsylvania, 1939 年) に公表されている。トマス・バージェスへの手紙の抜粋は、J. S. ハーフォード Harford 『神学博士トマス・バージェスの生涯』 *The Life of Thomas Burgess D. D.* (London, 1840 年) に見られる。また、W. R. ドーソン Dawson (編) 『バンクス家書簡』 *The Banks Letters* (London, 1958 年) も見よ。

エディンバラの知識階級は、堅く結ばれた集団となっていた。そこで、著名な法律家で、有名な奇行家であって、セレクト協会（これにはすべての知識人が属していた）の主要な会員として、モンボドは、実質的には、スコットランド啓蒙運動のすべての偉大な人物を知っていた。しかし、彼はディヴィッド・ヒューム（1711-1776）を、そして恐らく彼の友人、アダム・スミス（1723-1790）を、哲学に関する理由で、評価していなかった。ヘンリー・ヒューム、ケイムズ卿 Henry Home, Lord Kames（1696-1782）は、民事高等裁判官の同僚だったが（すべてのスコットランド哲学者が何らかのお陰をこうむっていた、スミス同様、発展の種子をまく人物だった）、彼の文学的競争相手であった。モンボドの友人には、デイヴィッド・ダルリンプル卿でヘイルズ卿 Sir David Dalrymple, Lord Hailes（1726-96）、歴史家で民事高等裁判官がおり、ジェイムズ・ボズウェル James Boswell（1740-95）は、伝記作家で、アフレック卿 Lord Auchinleck の息子であり、もう一人の著名な民事高等裁判官で、自身も弁護士であり、ウィリアム・スメリー William Smellie（1740-95）は、印刷業者で、好古家で、『ブリタニカ百科事典』の編集者であり、ジェイムズ・ビーティ James Beattie（1735-1803）は、詩人で道德哲学者で、ロンドンの文学、政治界で高い地位を占めていたが、それは主として、彼の『真理の本性と不易性についての試論』*Essay on the Nature and Immutability of Truth*（1770）で、ディヴィッド・ヒュームを攻撃したせいであった。しかし、ビーティは、そして恐らくスメリーも、モンボドに対立するようになった。⁽²⁴⁾

(24) ビーティについては、クロイド、47-8、64-6 頁を見よ。ビーティは、モンボドの考えを幾つか自分の「言語の理論」“The Theory of Language”（『諸論考、道德的及び批判的』*Dissertations: Moral and Critical* [London, 1783 年]）に名前を挙げずに利用しているが、それでもやはりモンボドを攻撃した（クロイド、65 頁）。スメリーについては、クロイド、49、56、186 頁を見よ。

アレクサンダー・ギリス Alexander Gillies とスメリーは、『言語の起源と進歩について』第 II、III 巻を悪意をもって攻撃した『エディンバラ雑誌と評論』に関係していたが、7号のうちで64頁を当てて、普遍文法と修辞学に歯に衣着せぬ批判を掲載した。（クロイド、53-6 頁）。

モンボド卿は、ジャコバイトの家庭の婦人、エリザベス・ファークァーソン Elizabeth Farquharson と結婚し、三人の子供をもうけたが、妻、息子、下の娘は、いずれも早逝した。

モンボド自身は、1799年5月25日、八十五歳で亡くなった。

6. モンボドと18世紀のスコットランド人文主義の名残り

多くの点で、モンボドは、18世紀の典型的なスコットランド哲学者であり、スコットランド文芸復興のまさに中心にいた。彼は、有名な弁護士であったが、その時は、エディンバラの法律家たちがスコットランドをより礼儀正しく、寛容で、啓蒙され、繁栄させることによって、「向上させる」ための運動を指導していた時期であった。彼は、セレクト協会の傑出した一員であったが、この協会は、法律家が主体となって論議する集まりであって、スコットランドの向上に決定的に重要な役割を演じたのである。彼はとりわけ、弁護士図書館——1750年までにはヨーロッパの大図書館の一つになっていた——に密接な関係を持ち、他の幾人かのスコットランド哲学者と同様に、『言語の起源と進歩について』を書く際には、この図書館の資産に大いに頼ったのであった。⁽²⁵⁾

しかし、『言語の起源と進歩について』の人文主義的諸価値、つまりスコットランド啓蒙運動の始まりに役割を演じた諸価値は、啓蒙運動のロック的経験主義の支配的精神と歩調を合わせていくことが殆ど出来なくなっていた。モンボドが敬った諸原則、弁護士図書館創立の諸原則でもあったものは、スコットランド人文主義とスコットランド法学の本来の形に具現化していたのだった。しかし、17世紀の間に、前者は、経験哲学の衝撃の下で衰退してしまっていたし、その衰退はロックの人気の高まりによって、18世紀初期に歩みを早めたのだった。そして、後者は、オランダの法律関係の学問によって修正されてしまっていたのだった。⁽²⁶⁾

したがってモンボドは、一般的に言えば、仲間の知識人たちの諸原則に

⁽²⁵⁾ I. S. ロス『ケイムズ卿と彼の時代のスコットランド』(Oxford, 1972年) 28頁。

⁽²⁶⁾ 本論文第III章を見よ。

対立していた。とはいえ、押さえておかなければならないのは、経験主義を強調することが流行してはいたが、17世紀初期の世界の観方、世界の中での人間の位置の観方——先験的 a priori な、抽象的で、演繹的で合理主義的——の何かが、啓蒙運動を貫いてスコットランド思想に影響を与え続けたことである。実際、一見したところでは等質的であるにも拘らず、18世紀中葉のスコットランド知識人の文化、長老派教会の穏和主義、そしてホイッグの功利主義とが、古い英国国教会的人文主義の下位文化の上にかぶさり、実は、それに影響されていたのである。そして、その下位文化こそが17世紀末と18世紀初めの文芸復興の最初の覚醒と結び付いていたのであった。⁽²⁷⁾

例えば、既に指摘したように、ファウルズ兄弟の出版物は、スコットランド啓蒙運動の初期の発展に非常に重要な役割を演じたのだが、彼らのジャコバイト的な自由主義的共感を反映し、フランス啓蒙運動とよりも、フェヌロン Fénelon やシュヴァリエ・ラムゼイ Chevalier Ramsay のキリスト教的人文主義と共通するものを多くもつ傾向がある。⁽²⁸⁾

そのような訳で、18世紀スコットランドの知的状況における重要な位置にも拘らず、モンボドは、近頃の言い方では「スコットランド人文主義者たちの注目すべき下位文化、古いヨーロッパ的スコットランド人のスコットランド、トリーとジャコバイト」⁽²⁹⁾ に属していたのである。そのことか

27) F. W. フリーマン Freeman『ロバート・ファーガスンとスコットランド人文主義の妥協』*Robert Fergusson and the Scots Humanist Compromise* (Edinburgh, 1984 年) vii 頁。

28) J. H. ブランフィット Brumfitt「スコットランドとフランス啓蒙運動」“Scotland and the French Enlightenment”,『啓蒙の時代』*The Age of Enlightenment*, バーバー Barber 他編 (1967 年) 327 頁。

1742 年に、シュヴァリエ・アンドルー・マイケル・ラムゼイ Chevalier Andrew Michael Ramsay は、ヒュームとロックについて、モンボドが繰り返すことになる言葉で書いた。「彼[ヒューム]は、私には、宗教や、宗教的か世俗的かは問わず、古い風習や伝統への顧慮なしに、自分の頭から「諸体系」を紡ぎ出すために考えるような哲学者の一人であるように思われる。」もう一つの例は、デカルトであるが、しかし、彼でも「あなたの薄手の、表面的な、乏しい、痩せた骸骨のようなロックより遥かに優れていた」(モスナー [1980 年] 95 頁)。

29) フリーマン, 同上書。

ら、彼は、宗教改革、1688年の革命の決着、1707年の合邦を不幸な出来事と見なしたのだった。⁽³⁰⁾ 彼はまた、仲間の知識人と長老派教会の穏和主義者の文化に関する見解を是認することは出来なかったし、まして、贅沢、重商主義、功利を進歩の基準とするホイッグ主義的信念を是認できなかった。

「スコットランド人文主義者が、ステュアート家の排除の後どのような国になったか、古い宗教と教会の階層組織の失墜、スコットランド議会の解体、大陸の協調国との分離、そして、古典的文化から新古典的文化への変化をじっくり考えているときに、彼は、主張されている功利のために生み出された自分の国の文化と歴史における断絶と不自然な破壊を見たのだった。」⁽³¹⁾

モンボドは従って、彼がローマ法を基礎としていたと考えたスコットランドの諸制度の連続性を再確立することに執念を燃やしたのであった。社会的、知的生活の混乱と彼が見たものに秩序を回復することへの彼の関心は、ローマ法の創設者と古代人全般の集団的知恵に対する深い尊敬の念を含んでいた。⁽³²⁾

ローマ法の諸原則を強調することが、モンボドの人文主義に特別にスコットランド的性格を与えているのであるが、彼は、ポープ Pope、スウィフト Swift、ギボン Gibbon、バーク Burke、そして、彼自身の友人ジェームズ・「ヘルメス」・ハリス James “Hermes” Harris と同様に、イギリス人文主義者に分類しても良からう。彼らすべては、精神が本質的な人間的属性であり、科学は道德哲学の次位に位置するものであると信じていた。すべてが、モンボドが反対した当代の世界の同じ特徴を慨嘆した。つまり、機械論、相対主義、資本主義、産業、そして、ニュートンとロックの新しい哲学であった。⁽³³⁾ そんな訳で、モンボドの思想に対するスコットランド

⁽³⁰⁾ 同上書、23頁。

⁽³¹⁾ 同上書、25頁。

⁽³²⁾ ポール・ファッセル Paul Fussell『新古典主義期の人文主義の修辞的世界』*The Rhetorical World of Augustan Humanism* (Oxford, 1969年) 21頁。

⁽³³⁾ フリーマン、同上書、29-31頁。『言語の起源と進歩について』第I巻、第I部、特に86-151頁。

法学の影響を限定して検討する前に、『言語の起源と進歩について』を性格付けている一般的な人文主義的特徴の幾つかを指摘するのが、有益であろう。

第一に、モンボドの宇宙、その中の人間の位置、精神と言語の観方は、本質的に階層組織的である。これは、古典古代と結び付いた秩序の理想的状态である。この完全な「存在の等級」Scale of Being は秩序付けられていると同時に多様なのだが、その中では、あらゆるものはその固有の位置を持っているのである。その上に、ある文明が抽象的思考において十分に発達するならば、「存在の等級」は観念の階層秩序に完全に反映されるのである。この階層秩序は、知的世界を構成するが、言語の形で表現されるのである。⁽³⁴⁾

こうして、民族の心的発達とその言語との間には、密接な関係が存在する。両者は、野蛮から様々な程度の文明まで、等級において異なる。しかし、精神と言語の基に横たわる諸原則は、不変であって、その抽象の程度に基づいて固定した尺度に従って評価できるのである。（この点で、モンボドは、固有の母語を最良のラテン語の水準まで引き上げようというルネッサンス的理想に従った、ピトケアンやラディマンのようなスコットランドのラテン語学者に似ている。但し、モンボドの関心の対象は、標準英語であり、彼の模範は、ギリシア語であった。）⁽³⁵⁾

理性と言葉——生得ではなく獲得されたものだ——が人間を獣の上に引き上げるのである。雄弁は、文明社会の特質であり、言語的墮落は、社会の崩壊の印である。理性と言葉が欠陥を持つならば、伝達が損なわれ、社会的階層秩序に必須である正当な従属関係が不可能となる。⁽³⁶⁾

精神も言語も、自動的にあるいは偶然によって発達することはない。両者とも、人間の自由意志の活動の結果であり、その自由意志は、野蛮状態を克服しようとする努力において現れるのである。人間はその感覚においては制限されているが、自由な行動主体なのである。要するに、すべての

34 フリーマン、同上書、29-30頁。『言語の起源と進歩について』第I巻、第III部、特に514-73頁。

35 フリーマン、同上書。本論文の第VI章を見よ。

36 フリーマン、31-2頁。本論文の第VI章を見よ。

人文主義者と同様に、モンボドは、盲目的因果関係と偶然的秩序というエピクロスの観念に反対する。彼が特に反対したのは、私悪は公益に通じるというマンドヴィル Mandeville の考えであり、一般的には、意図されざる社会的諸結果という観念である。このことは、アダム・スミスの「見えざる手」や、理性に先んじて存在すると想定されるハチソンのいう道德感覚のような決定論的機械論を拒否することを含んでいる。そのような機械論は、ホイッグ主義の一部と見なして良いだろう。⁽³⁷⁾

最後に、諸伝統とわれわれの先祖の知恵がわれわれの野蛮状態の克服を助けてくれはするが、人間は、完全な状態にまで進歩することはない。歴史は循環する。伝統的知恵は、一定程度の安定を与えるにすぎないのである。⁽³⁸⁾

⁽³⁷⁾ ファッセル、同上書。

⁽³⁸⁾ 同上書。

第 III 章 弁護士図書館と人文主義的法学の伝統

1. スコットランド啓蒙運動に対する弁護士協会の影響

弁護士協会の図書館がスコットランド法学の黄金時代の初期に設立された法律書図書室であったという事実は、『言語の起源と進歩について』の創まりとスコットランド啓蒙運動全体との両方に関して、意義深いことである。⁽¹⁾

スコットランドにおける文芸の復興の発展を跡付ける時、法学の研究や、大きい社会的威信を持っていたエディンバラの法律家たちの重要性をいくら強調しても強調し過ぎることはない。⁽²⁾

弁護士協会の会員たちの影響は、終極的には、スコットランドの生活と文化における法学の占める中心的位置から出て来たものである。長い間、スコットランド人文主義とはスコットランド文化のことであると受け取られて来ていたので、法学の人文主義的研究も同様に、この国の知的生活と密接に結び付けられるようになっていた。実際、スコットランド法廷がロンドンに移された17世紀の初め以来、弁護士たちは、実質的に国民的文化の守り手となっていたのであった。そして、彼らの大陸との密接な結び付きは、それを豊かにすることに役立っていた。⁽³⁾

基盤の広いスコットランド法学の研究は、大陸のローマ法の影響の下で発展してきたのであったが、スコットランドの法律家たちは、宗教改革ま

(1) ジョン・クライヴ John Clive 「スコットランド・ルネッサンスの社会的背景」 “The Social Background of the Scottish Renaissance”, 『向上の時代のスコットランド』 *Scotland in the Age of Improvement*, N. T. フィリップソン Phillipson と R. ミッチソン Mitchison 編 (Edinburgh, 1970 年) 228 - 31 頁を見よ。ニール・マコーミック Neil MacCormick 「法と啓蒙」 “Law and Enlightenment”, 『スコットランド啓蒙運動の起源と本質』 *The Origins and Nature of the Scottish Enlightenment*, R. H. キャンベル Campbell と A. S. スキナー Skinner 編 (Edinburgh, 1982 年)。

(2) クライヴ, 同上書。

(3) 同上書。ダグラス・ダンカン 『トマス・ラディマン』 (Edinburgh, 1965 年) 24 - 5, 36 - 8 頁。

ではフランスで研究し、それ以後はオランダで、ユトレヒト、ライデンや（モンボドのように）グロウニンゲンへ行って、研究したのであった。⁽⁴⁾

したがって、スコットランド法学の発達には、二つの段階が区別できるだろう。最初はそれは、いわゆる「フランス的慣習 *mos Gallicus*」, つまりフランスの歴史的＝文献学的伝統（これはまた修辞学と批評を強調した）から生じてきた。それから次に、17世紀になって、オランダの学問の偉大な時期となり、それは、フーゴ・グロティウス *Hugo Grotius* のプロテスタント的な自然法の復活の影響を受けることになった。この後者は、道德哲学、法哲学、そして、現在でいう政治科学と混じり合ったのである。⁽⁵⁾

フランスと違って、オランダの特徴は、ラテン語に比べてギリシア語への関心が遥かに小さかったことである。そこで、まさにこの源泉から、17世紀スコットランド人文主義は、ラテン文献の研究を通じてローマ的諸価値と諸制度を継続させるという観念を受け継いだのであった。⁽⁶⁾

文芸の復興が1707年の合邦後に弾みをつけ始めたとき、エディバラの法律家たち、特に弁護士が、スコットランドの向上と啓蒙の運動の指導者となるのは、必然的であった。更に、記憶にとどめておくべきは、（例えば、モンボドやケイムズと違って）現実には自身が弁護士でないスコットランド哲学者たちが、少なくとも、法律関係の訓練を受けていたことである。そこで、彼らの人間と社会の研究と、スコットランド法学の研究——これは、道德、社会的慣習、政治経済機構との関係における法の諸原則を扱っ

(4) I.S. ロス 『ケイムズ卿と彼の時代のスコットランド』 (Oxford, 1972年) 21頁。D. B. スミス Smith 「ローマ法」 "Roman Law", 『諸著作家によるスコットランド法の源泉資料と文献の予備的調査』 *An Introductory Survey of the Sources and Literature of Scots Law by various authors* (Edinburgh, 1936年)。S. G. カーマック Kermack 「自然法学と法の哲学」 "Natural Jurisprudence and Philosophy of Law", 同上書。

(5) マコーミック, 同上書。クライヴ, 同上書, 230-1頁。カーマック, 同上書。F. P. ウォルトン Walton 「フランスの法のスコットランドの法との関係」 "The Relationship of the Law of France to the Law of Scotland", 『法曹評論』 *Juridical Review* (1902) XIV, 19-34頁。

(6) ダンカン, 同上書, 150頁。

たのだから、その二つの研究の間には、密接な関係が存在することになった。⁽⁷⁾

したがって、スコットランド啓蒙運動の世紀が同時にスコットランド法学の偉大な時代でもあったのは、決して偶然ではない。また、スコットランド哲学者たちが道徳哲学に抜きんで、そして、歴史、批評、修辞学に優れていたことも、偶然ではないのであって、弁護士図書館の創設者は、これらの学問をスコットランド法学の召し使いであると述べているのである。⁽⁸⁾ そしてまた、法律家たちが(幾らかの教授や温和派の聖職者と共に)、文芸の復興と、修辞学と道徳哲学に基礎をおいたスコットランド文化の洗練された再規定とを企図した時、彼ら知識階級が自分たちの基本的供給源として弁護士図書館に向かったのも、偶然ではなかったのである。⁽⁹⁾

2. 弁護士図書館の創設と17世紀後期の人文主義的文化の復活

これは、弁護士図書館が文化的復興と結び付いた最初の間機ではなかった。この図書館が存在することになったのは、スコットランド人文主義の明確な伝統を保持する運動のお陰であった。その運動は、宗教改革の後で始まり、伝統的な英国国教会的人文主義文化の短期間の繁栄を生み出した。この運動の指導者のなかには、スコットランド法の編纂者であるジェイムス・ダルリンプル、初代ステア子爵 Viscount Stair (1619-1695) とロウズホーのジョージ・マッケンジー卿 (1636-1691) がいた。マッケンジー卿の法学についての包括的な言説は、16世紀スコットランドの諸大学の後期アリストテレス的伝統やジョージ・ブカナンの憲法関係の著作と結び付いていた。⁽¹⁰⁾

(7) クライヴ, 同上書, 227-8頁。

(8) ロウズホーのジョージ・マッケンジー卿, 『開館式辞…』 *Oratio Inauguralis* ... (London, 1689年)。J. H. ラウドン Loudon による訳「弁護士図書館公式開館に当たってのジョージ・マッケンジー卿の演説」“Sir George Mackenzie's Speech at the Formal Opening of the Advocates' Library”, 『エディンバラ書誌学協会紀要』 *Edinburgh Bibliographical Society Transactions*, II, 4 [1946年] 282頁。

(9) ロス, 同上書, 28頁。ダンカン, 同上書, 136頁。

(10) ダンカン, 同上書, 147-8頁。

多くの面で、事態は、16世紀フランスにおけるそれと似通っていたように思われる。スコットランドの弁護士たちは、国民的文化の擁護者で、学問の復興と、宗教的寛容と国民的統一の促進を意図した、キケロとストア学派に基づいた幅広い、人文主義的文化推進計画に関心を抱いていた。(もし経済的繁栄が付け加われば、これは、18世紀のスコットランド弁護士たちの計画を述べることと同じになるであろう。)⁽¹¹⁾

しかし、17世紀スコットランドでは、もう一つの問題が付け加わっていた。法律家たちは、特にラテン語の衰退に恐怖を感じていた。というのも、ラテン語は、それを用いて16世紀スコットランド人文主義者が国際的名声を勝ち得た、ヨーロッパの学問の言語であったからである。1603年以来、英語の使用が力を得てきたが、学者たちは、ラテン語よりも自信が持てないまま英語を書いていた。その上、ラテン語は、単にスコットランド人文主義の偉大な時代との結び付きだけではなく、既に見たように、古代ローマの諸制度、諸価値、文学との結び付きを提供したのである。⁽¹²⁾

この17世紀後期の英国国教会的人文主義の復活は、スコットランド啓蒙運動が主として基礎としたアングロ＝フランス的新古典主義の拡大を遅らせたかも知れないが、その復活が啓蒙運動への道を開いたことも同じように言えるであろう。それは、その復活の最高の成果において最も明らかに見て取れる。すなわち、ジョージ・マッケンジー卿の弁護士図書館の設立であって、これが後に18世紀の文芸復興にとって決定的に重要となったからである。⁽¹³⁾

第一義的には、法律関係図書室であったが、弁護士図書館は、明らかに、当初から国民的図書館として機能した。そして、もしジョージ・マッケンジー卿の計画が完成していたならば、それはまた、論議する集いの場所と

(11) ジェラルド・E・サイゲル Jerrold E. Seigel 『ルネッサンス人文主義における修辞学と哲学：雄弁と知恵の結合、ペトラルカからヴァラまで』 *Rhetoric and Philosophy in Renaissance Humanism: the Union of Eloquence and Wisdom, Petrarch to Valla*. (Princeton, 1968年) xii 頁。

(12) ダンカン、同上書、150頁。また、G. E. デイヴィ 『民主的知性』 (Edinburgh, 1961年) 230頁を見よ。

(13) ダンカン、同上書。

もなり、そこでは、広範な文学的、哲学的問題が討論されたことであろう——丁度、弁護士たちが主体となったセレクト協会で成されることになったように。⁽¹⁴⁾

この図書館の最初の目録(1692)は、1689年の正式な開館に当たって、マッケンジーによって成されたラテン語の式辞が序文として付けられているが、偉大なカルヴァン主義的人文主義者たち、ジョージ・ブカナンとJ. J. スカリゲルに捧げられている。これは、意味深長なことなのである。何故なら、ジョージ・マッケンジー卿の演説が賛辞を呈しているのは、16世紀の歴史的＝文献学的法学のフランス学派と結び付いたスコットランド法学の本来的人文主義的伝統に対してだけであるからだ。17世紀の大陸の自然法学者の著作が既に1692年目録でも目立っているが、マッケンジーは、グロティウスやプーフENDORFの名は挙げていないのである。それどころか、彼は、スコットランド人文主義的伝統にとって脅威と見なしていたことが明らかな、オランダのプロテスタント的法律関係の学問の影響を、それとなく貶しているように見える。⁽¹⁵⁾

3. ジョージ・マッケンジー卿の人文主義的諸原則と弁護士図書館

ジョージ・マッケンジー卿の式辞は、弁護士図書館が基づくべきと彼が明らかに信じていた伝統的なスコットランド人文主義の価値を表明している。それらはモンボドの哲学も基礎としていた価値であったから、この式辞を注意深く検討することは、報酬を約束するものである。

(14) ジョージ・マッケンジー卿の『式辞』(ラウドン訳) 278頁。セレクト協会については、本論文第VII章を見よ。

(15) 1692年目録を見よ、正式題名は『弁護士協会図書目録』*Catagolus Librorum Bibliothecae A Facultate Advocatorum* である。マッケンジー、同上書。そこで彼は、自然法に関する道德哲学者たちの「思弁」を「詰まらぬがらくた」また「執政官の布告にとって何の役にも立たぬもの」*nihil a Edictum Praetoris* (282頁)と呼んでいる。

マッケンジーの法曹関係の著作は、ブルージュ Bourges のジャック・キュジャース Jacques Cujas (クヤキウス Cujacius) によって設立された人文主義的注釈者学校での訓練を反映している。ロス(1972年) 22頁を見よ。

マッケンジーは、この図書館がローマ法と人文主義的法学の諸原則に集中すべきものであることを明らかにする。この図書館は、法学の研究に貢献する著作のみを収めるべきである。というのは、彼は、法学こそ「諸科学の女王」であると見なすからである。しかし、法学という科学の守備範囲は非常に広いので、そのように言うことは、この図書館が「ギリシア人とローマ人の知恵のすべての果実」を、その後の時代の学者たち、特にローマ法の注釈者たちが古代人の発見したものに付け加えたものと共に、収めなければならないことを意味する。⁽¹⁶⁾

ローマ法に関する著作の中では、ユスティニアヌス Justinian の『学説彙纂』*Digest* (「テキストそのもの」) が、図書館と法曹職業の基礎としての地位を誇っている。『学説彙纂』は、「人間の欲求の総体」に応える「絶対的理性」の表現である。それは更には、「ローマ人にとりより天なる神に我々が負っている神聖な偉業であり、地上の我々に、立法者にとっての範型となり、人間の諸民族の間での判定者となるようにと下賜されたもの」である。したがって、『学説彙纂』のテキストの純正性の回復が、第一義的重要性を持つ事柄なのである。⁽¹⁷⁾

マッケンジーにとっては、ラテン語が学問の国際言語であり続けている。つまり、「諸科学の自然的発出であり、住み家」なのである。しかし、『学説彙纂』のテキストの純正性の回復はまた、ギリシア語と法学の召し使いである歴史、批評、修辞学との徹底した知識に依存するのである。⁽¹⁸⁾

古代のギリシア及びローマの歴史家たちから、市民法の起源と発達を辿ることが出来るだろう。「法学の曙は、最初にアテネとスパルタの上に訪れた」そして、600年間ローマ法は、ギリシア的様相を呈した。そこで、市民法の歴史は、初期のギリシア人の中の「合理的性質の最初の刺激」から始まり、正しき理性の支配とコンスタンチノーブルのギリシア人注釈者たちへと進んで行く。要するに、法の歴史は、精神の歴史である。⁽¹⁹⁾ マッケンジーの言葉によって、ローマ法の創設者たちが法と統治の起源と発達

(16) マッケンジー、同上書、277, 184 頁。

(17) 同上書、278-9 頁。

(18) 同上書、282-3 頁。

(19) 同上書、280-1 頁。

の問題に没頭したことが、どのようにして諸民族の歴史と彼らの社会的諸制度一般、特に言語——というのは、それが精神の表現と見られたからだが、それらへの関心につながって行ったかが分かるのである。

マッケンジーはまた、批評の重要性を一貫して主張する。法において普通に用いられるギリシア語とラテン語の言葉の力と意義は、古典文学と詩の細部におよぶ研究なしには、理解できない。それらは、有名な『学説彙纂』の題目「言葉の意味について」“De Verborum Significatione”に関する諸注釈の価値ある源である。したがって、古代の注釈者たちは、歴史と批評という「科学」を知らなかったために、ひどく不利な条件の下に立たせられていたのである。⁽²⁰⁾

法学の研究にとっての修辞学の重要性も、同様に明らかである。修辞は、精神の表現であり、精神は、法の本質であるからだ。その上、修辞は真理を美しく飾るのである。⁽²¹⁾

このテキストの純正性を回復した著作だけでなく、マッケンジーは、法の比較に関する書一卷とその比較から生ずるだろうと彼のいう普遍的合理的な基準、「理性によって設定された基準」に関する書一卷が必要であるという。スコットランド哲学者たちは明らかに、社会の歴史に対する比較による研究姿勢を、ルネッサンスのこの法に関する伝統から引き出したのである。モンボドの諸言語（それらは文明の様々な段階を表しているのだが）の比較も、同じ源から出て来ている。マッケンジーと同様に、彼は諸言語を比較して、すべての言語が判定できるような合理的基準に到達しようとするのである。⁽²²⁾

②① 同上書，283 頁。

②② 同上書。

②③ 同上書，282 頁。『言語の起源と進歩について』第 II 卷，第 3 部参照。

ローマ法学者は、イエニッシュ Jenisch が古代と当代のヨーロッパの言語を比較して、完璧な言語（ギリシア語）の理想像を見出したように（セイス Sayce, 1900 年，32 頁），諸国民の法が一致する点に，人々の法 *jus gentium* を見出したのであった。D. イエニッシュ『14 の古代と現代のヨーロッパ言語の哲学的，批判的評価』*A Philosophical and Critical Estimate of Fourteen ancient and modern European Languages* (Berlin, 1796 年)。この論文は，ベルリン・アカデミーの賞を獲得したが，モンボドのものと類似した諸原則を表明している。

要約して言えば、マッケンジーのラテン語の式辞は、弁護士協会の会長 Dean としての地位の権威をもって述べられたものだが、人文主義法学の精神に満たされている。この伝統は、16世紀フランスの「法服の文化」“culture de robe”から、そして、終極的には、モンボドが頻繁に言及しているイタリアの法律顧問から来ていた。マッケンジーが主要な人文主義法律家の名を挙げ、彼らの著作が既に最初の弁護士図書館目録に収められていることは、意義深い。その法律家とは、特に、使徒伝承のように継続しているロレンツォ・ヴァラ Lorenzo Valla, ギヨーム・ビュデ Guillaume Budé, アンドレア・アルチアッティ Andrea Alciati, ジャック・キュジャースである。マッケンジーによれば、弁護士の任務は、文献学におけるこれらの人々の仕事を継続することなのである——文献学とは、キケロ的な「人間性の研究」*studia humanitatis* (文法, 修辞学, 歴史) を基礎として、ヴァラ (1406 頃-1457) によって確立された科学である。⁽²³⁾

モンボドの見解は、マッケンジーのものと同様に、「ヨーロッパで最高のギリシア語」“le plus grand Grec de l'Europe”というギヨーム・ビュデの考えに特に近いように思われる。フランスとスコットランドの法学の結び付きと同時にビュデの得ていたヨーロッパ全域にわたる名声——彼こそ人間の未来のための新しい文献学を約束する人と思われていた——とを考慮すれば、これは驚くべきことではない。⁽²⁴⁾

4. ギヨーム・ビュデと人文主義法律家フランス学派

ビュデ (1467-1560) は、ルネッサンスの重要人物であるが、スコットランド法学の発展に影響を及ぼしたフランス人文主義法学の全学派の代表と考えても良いだろう。⁽²⁵⁾

ビュデは、ギリシア語文献を翻訳し、注釈を付け、そして、彼の言語に

⁽²³⁾ マッケンジー, 同上書, 279, 283 頁。

⁽²⁴⁾ ドナルド・R・ケリー Donald R. Kelly『近代歴史学の基盤: フランス・ルネッサンスにおける言語, 法, 歴史』*Foundations of Modern Historical Scholarship: Language, Law and History in the French Renaissance* (Columbia U. P., 1970 年) 53, 57-8, 80 頁。

⁽²⁵⁾ 同上書。

関する諸論文は、一つの学問としての文献学の確立に導いたのであった。彼は、コレージュ・ド・フランス Collège de France (人文主義的研究促進のため設立された) と王立図書館 Bibliothèque Royale の創設に一役買ったのであった。この図書館が、『言語の起源と進歩について』の創まりにとって、また、スコットランド啓蒙運動全体にとって、非常な重要性を持つことになるのであった。彼らまた、当時の主要な学者たちの文通相手でもあり、中にはエラスムス Erasmus やトマス・モア Thomas More も含まれている。⁽²⁶⁾

マッケンジーやモンボドのように、ビュデは、ローマ法を人間的及び神的事柄の科学、つまり教義と雄弁の理想的総合と見なしていた。ビュデが望んだのは、社会の公益のために、ラテン語と古代文化の失地を回復することであった。しかし、スコラの論理学を批判してはいたが、彼は、在来のアリストテレス的哲学を退けてはいなかった。彼は、文献学を古典に関する学問の貯蔵庫、言い換えればキケロ的「人間性の研究」に基づく科学と見ていたが、この研究は、人文主義的な百科辞典的知識に照らしてのテクストの歴史的解釈を含むものであった。この見解は、法の研究が、哲学や他の主題と密接に関連させられていた 18 世紀スコットランドでも通用するものであった。⁽²⁷⁾

一方で、彼は、言語を、誤解の源と見たが、他方では、思考を育てるもの、更には、思考そのものとも見ていた。この両価的態度は、スカリゲルとサンクティウスの仕事へとつながり、また、17, 18 世紀の哲学的言語の追究へとつながって行くことになる。⁽²⁸⁾

歴史的法学学派の大多数の他の者たちと同様に、ビュデは、言語変化に

26 同上書, 59 頁。彼の『「学説彙纂」注解』*Annotations on the Pandects* (1508 年) は、ローマ法に新しい批評の方法を導入した。彼の目標は、古代の教義の純正性を回復して、社会を改良することであった(同上書, 56-7 頁)。ビュデは、『学識の研究』*Study of Learning* (1527 年) と『文献学』*Philology* (1530 年) で文献学を推進した。彼の『ギリシア語注釈』*Commentaries on the Greek Language* (1529 年) は、ギリシア語彙論の基礎を置いたものである(同上書)。

27 同上書, 64-6 頁。

28 同上書, 62 頁。

興味をもっていた。法の場合と同様に、言語における変化は、それを用いる社会の歴史と慣習に支配される。そこで、「言語の科学」はそれらの変化を説明できるであろう。語は現実を反映するのであるから、古代文化を再現するには、テオドーロ・ガザ Theodoro Gaza がやったように、廃れつつある語を救い上げねばならない。精神の進歩にとって鍵になるのは、諸言語の復旧である。しかし、モンボドと同様に、ビュデも、言語を超越し、超自然的形態におけるロゴスを追究しようとした。最後に、ビュデは、古代と当代の諸制度の間の類似点を探し求める比較方法を導入した。しかし、ビュデが相対主義者であったのに対し、マッケンジーとモンボドは、そのような比較から浮かび上がってくるだろうと考えた理性の時間を超えた、普遍的真理に関心をもっていたのである。⁽²⁹⁾

5. フランス的慣習 *mos Gallicus* と完全な歴史の概念

ジョージ・マッケンジー卿の式辞はまた、「完全な歴史」という考え、これは後に哲学的、合理的、或は推測的歴史として知られることになるが、それがフランス的慣習 *mos Gallicus* から生じたことを思い起こさせる。

出来事の原因を説明するからということで、フランスの人文主義法律家たちによって「最も確実性のある哲学」と見なされたものだが、完全な歴史という概念は、マッケンジーが名を挙げているその同じ学者たちによって展開された。——ビュデ、アルチアッティ、キュジャースであり、また、最初の弁護士図書館目録に現れる他の学者もいた。注目すべきは、ジャン・ボダン (1530?–1596) とフランソワ・オトマン (1524–1590) である。ジャック・キュジャース (1520–1590) は、確実にモンボドに影響した人だが、その黄金時代 (1559–1590) に、ローマ法の歴史学派の指導者になった。彼の追従者たちは、モンボドのように、アテネがローマ法を通して文明社会を教えているのだと考えた。したがって、彼らは、ローマ法の「起源と進歩」の跡を辿ることによって、古代の法学を回復しようとした。この法——また他の諸制度——の起源への固執は、典型的に人文主義的で

(29) 同上書, 62, 75–9 頁。マッケンジー (1689 年) 282 頁。『言語の起源と進歩について』第 I 巻, v–vi, 7–8, 35–6 頁等。

あって、多くの注釈が成された『学説彙纂』の中の一つの題目「法の起源について」に反映している。⁽³⁰⁾

彼らの普遍的歴史という考え方は、キケロとクインティリアヌスに遡る修辞学的根源を持っていた。歴史は、実例の集積所であるから、それが記憶に具体的姿を与えるので、雄弁家に係わりを持つのである。更にその上、それは、言葉ではなく事物に、自然ではなく人間に係わっている。そして、人間の歴史、文明の発生と進歩は、自然の歴史よりも感嘆すべきものである。（これはまさに、18世紀における科学のパラダイムであって、モンボドによって、自然史に対抗して用いられた議論である。）つまり、歴史は、出来事の「原因」を説明する。法学と同様に、歴史によってわれわれは、知恵を獲得することが出来る。歴史を通してわれわれは、人間が達成した事柄に対する展望を得て、人間的及び神的事物の知識へと上昇する。この普遍的歴史、人類の物語には、どのような形で手を付けるべきなのだろうか。⁽³¹⁾

それは、ディオドロス・シクルス Diodorus Siculus やポリュビオス Polybius がしたように、まさに始源から始めなければならない。それは、新世界の人々のような野蛮な民族の歴史を含まなければならないが、その人々は、書かれた歴史を持たないので、古代や同時代の旅行者からの情報を基礎にして、歴史を再構成して貰わなければならないのである。言い換えれば、16世紀の法学のフランス歴史学派の方法は、まさに18世紀にフランスとスコットランドの哲学者たちが採用した方法なのであった。⁽³²⁾

ローマ法の歴史学派の見地からすると、科学的（つまり完全な）歴史は、哲学より頼りになった。それは、現在の課題を解決し、未来を予測し得るものにしたのである。⁽³³⁾

(30) ジョージ・ハパート George Huppert『完全な歴史という観念』*The Idea of Perfect History* (Urbana, 1970年) 第1章。ケリー (1970年) 90-1頁も見よ。

(31) ケリー (1970年) 130-1頁。

(32) 同上書, 134頁。

(33) 同上書, 137-8頁。ハパート, 21-26頁。ハパート, 21-26頁。N. W. ギルバート Gilbert『方法のルネッサンスにおける概念』*Renaissance Concepts of Method* (New York, 1960年)。

すべての技能と科学の起源と進歩は、法学のフランス歴史学派によって研究されたのであったが、諸言語の歴史は、その学派のとりわけでの関心の対象であった。すべての事物と同様に、言語は、起源を持ち、進歩する。それは、墮落を被り、死に至る。そればかりではなく、同じ文化を持つ諸言語と、社会構造自体は言うまでもなく、他の諸制度との間には、密接な諸々の相関関係が存在する。⁽³⁴⁾

更に、普遍的法、つまりマッケンジーによれば、良い法と悪い法の判定基準に到達するために、すべての知られている諸社会を比較することと、すべての知られている諸言語の比較によって普遍的文法を確立することとの間には、明白な並行関係が存在する。ローマ法の歴史学派の黄金時代は、同時に、スカリゲルとサンクティウスの時代でもあったのは、偶然ではないのである。というのは、この二人はモンボドとジェイムズ・ハリスによって最も褒め讃えられた後期ルネッサンスの文法家だったからである。⁽³⁵⁾

モンボドがロックの名前と結び付いている「歴史的で平明な方法」によってロックに答える際に、実際には人文主義法学の伝統に帰りつつあることを実感していなかったとは、信じ難いことである。単に、モンボドが歴史的法学のフランス学派の研究（特定的に言えばビュデとキュジャース）に親しんでいただけでなく、同じ方法が、その著作を彼が良く知っていた16世紀のスコットランドの法律家たちによって、スコットランドの法律に応用されていたということなのである。⁽³⁶⁾

モンボドが苦勞して強調しているように、言語と法学の研究の関係

34 ケリー、80-4頁。ハパート、115頁。ハパートは、特に、ロワ・ル・ロワ Loys Le Roi『変遷について、または世界の事物の多様性』*De la vicissitude, ou variété des choses en l'univers* (1575年)の第2章を論じている。この著作は、ジャン・ボダンの方法に従っている。ハパートは、ル・ロワは、人間が経済的な努力目標に応えるなかで進歩すると見たのだが、18世紀の哲学的歴史のすべての特徴を備えていると指摘している。

35 マッケンジー (1689年) 282頁。ケリー (1970年) 77-8頁。

36 例えば、リッカートンのトマス・クレイグ卿 Sir Thomas Craig of Riccarton (1608没)『封建法』*Jus Feudale* (London & Edinburgh, 1655年; Leipzig, 1716年; Edinburgh, 1732年)。

は、ストア派にまで遡る。彼らこそ、最初に言語を論理学や認識論と結び付けたのであり、それは知識をわれわれの観念と自然の現実の事物との間の一致に等しいとしたことによるのである。そのような一致は、人間の道徳的生活と「存在の鎖」への調和のとれた参加にとって必須のものであった。こういう理由で、ローマ法を創立した法律顧問たちは、語の起源と、語が反映する事物の種との両方を詳しく研究したのである。『学説彙纂』の中の有名な題目「用語の意味について」“On the Meaning of Terms”は、マッケンジーも言及しているが、ヴァラ以来ずっと、語の起源、語源、言語の変化を扱う数知れない注釈の主題となったのである。⁽³⁷⁾

6. トマス・ラディマンと人文主義の衰退

明らかなことだが、ジョージ・マッケンジー卿は、人文主義法学と一般的に人文主義が、ロックの『人間知性論』公刊前夜に、既に衰退に向かっていくことを見て取っていた。1720年代までには、この過程には、加速度が付いていた。スコットランド人文主義の衰退は、エディンバラのジャコバイトと英国国教会徒集団の衰退と並ぶものであった。スコットランド人文主義は、ロック的経験主義の精神に取って代われ、また、シャッフツベリのヘレニズムに対する熱情を持った長老会派の温和主義者の上品な自由主義に取って代わられたのである。間もなく、趣味の礼賛の到来と共に、ラテン語は、紳士階級のたしなみに過ぎないものとなるだろう。⁽³⁸⁾

人文主義的伝統は、主としてトマス・ラディマン（1674–1757）によって、次の世紀まで持ちこたえられた。ラディマンは、1730年から1752年まで、弁護士図書館の保管者で、第二の目録（1742）の編纂者であったが、この図書館を文芸復興の武器庫とするのに貢献することになった。⁽³⁹⁾

早くも1718年に、ラディマンは、古典研究を促進するためにあるクラブを設立したのであった。これは、哲学的傾向の強いランケン・クラブ Rankenian Club に対立するものであったが、このクラブは啓蒙運動の温

⁽³⁷⁾ マッケンジー、283頁。ケリー、89頁。『言語の起源と進歩について』第I巻、432頁。

⁽³⁸⁾ ダンカン、同上書、147頁。

⁽³⁹⁾ 同上書、93頁。

床であった。そして、モンボドのように、彼は、徹底的にロックに、特にロック的教育観と言語観に、そして、流行の趣味の礼賛に反対した。⁽⁴⁰⁾

弁護士図書館の保管者として、ラディマンは、「有益な知識」——古代人に対して明らかにされた諸真理の取り戻しと、上品な教養との間の区別をした。(モンボドとヘイルズは管理者として、当代の古典的作品と美文学を排除するという方針に従うことになったが、新しい保管者として着任したヒュームが発見した事態はそれであった。) ラディマンにとっては、モンボドにとってと同じく、「有益な知識」——即ちあらゆる確かな知識——への入り口とは、ラテン語とギリシア語の規則に基づいた研究であった。いかなる当代の言語より優れて、これらの学識言語は、学識を獲得し、英語を規則化するための普遍的模範を提供するものだったのである。⁽⁴¹⁾

(40) 同上書, 146-9 頁。

(41) 同上書, 88-89 頁。ラテン語とギリシア語の優越性については、ディスポーター Despauter のもの取って代わったラディマンの『ラテン語の基礎』(1714 年) の序文を見よ。これは、1732 年までに第 7 版、1769 年には第 17 版に達し、19 世紀の第三四半期まで増刷され続けた。セント・アンドルーズのラテン文学教授で、モンボドのかつての書記だったジェイムズ・ハンターは、これに思考と言語の関係に関する長い覚え書きを付した。

「野蛮」言語に対する人文主義者の態度の継続については、19 世紀に出た『ブリタニカ百科事典』における多くの項目を見よ。例えば、6 版の “Philology” (1823 年) 第 XVI 巻, 283 頁。補遺の “Languages” (1824 年), 8 版の “Language” (1857 年) 第 XIII 巻, 194-9 頁。また、セイス, 「野蛮な種族の技能に欠けるジャーゴン」 “the artless jargons of barbarous tribes” (セイス, 1900 年) を見よ。

第 IV 章 18 世紀のスコットランドにおける言語的、文化的ディレンマ

王政復古の時期においてジョージ・マッケンジー卿を悩ませていた言語的、文化的ディレンマは、18 世紀初期にはスコットランド人文主義の急速な崩壊と共に遥かに激しくなっていた。

スコットランド語は、スコットランド法廷がロンドンに移された 1603 年の合邦以来、文学言語としては衰退に瀕していた。そして、既に見たように、マッケンジーのような教養あるスコットランド人は、英語よりもラテン語のほうを好むのが普通である状態が続いてきた。ということは、ラテン語がもはや国際的学問言語ではなくなったことが明白な 18 世紀初期までには、スコットランドは、文学言語を持たないままの状態にあったのである。他方、1707 年の議会の統合の後には、英語が、これをスコットランド人は境界地方の南では認容されないようなやり方で、話し、ある程度まで書いていたが、次第に重要性を増してきた。⁽¹⁾

その上、モンボドのような人文主義者たちが気付いていたように、スコットランドの言語的危機は、更に一層基本的な国民的統合感覚の危機に関連していたのである。スコットランド人文主義は、上で見たように、長い間国民的文化全体と同じものであると見なされていたのだった。そこで、1707 年の統合は、スコットランドから議会を奪い取ったばかりではなく、スコットランドを遥かに強力に進んだ隣人と結合したのであった。⁽²⁾

(1) 本論文第 III 章を見よ。また、ダンカン、同上書、150 頁。D. D. マッケロイ McElroy 「18 世紀スコットランドの文学クラブと協会」 "The Literary Clubs and Societies of 18th Century Scotland" (エディンバラ大学卒業論文、未公開、1952 年)166 頁。オクタタイアのジョン・ラムゼイ『18 世紀のスコットランドとスコットランド人』 A. アラーディス編、2 巻 (Edinburgh & London, 1888 年) 各所。『エディンバラ評論』 *Edinburgh Review* I (1755 年) 11 頁。

(2) 一般的には、デイヴィッド・デイシャス David Daiches 『スコットランドと合邦』 *Scotland and the Union* (London, 1977 年)、また特に、彼の『スコットランド文化の逆説』 *The Paradox of Scottish Culture* (London, 1964 年) を見よ。

その結果、スコットランドでは、時代に遅れているという圧倒的な感覚が生まれ、一般的な文化的向上を求める激しいスコットランド人の要求が現れた。進歩は、教養として英語を、そしてイギリス哲学を、つまりフランス啓蒙運動が主たる基盤としているベーコン、ニュートン、ロックの哲学を身に付けることにあるように思われたのである。キケロに源を持つ修辞学と哲学のこの結合は、勿論、啓蒙運動全体がルネッサンスから受け継いでいた文化的プログラムであった。しかし、スコットランドでは、その結合は特別な意義をもっていた。というのは、スコットランドの言語的ディレンマがあったからであり、また同時に、スコットランドの人文主義的伝統との密接な結び付きがあったからである。⁽³⁾

世紀半ばまでには、修辞学と美文学の研究が一般的な趣味の礼賛の一部として流行するようになり、英語能力を向上させたいというスコットランド人の側での欲求は、16世紀に見られたラテン語に対する熱情と同じような激しい気持ちに達していた。もしスコットランドが新しい隣人に完全に凌駕されるべきものではないとすれば、スコットランドは、対等の相手としてその役割を果たさなければならないであろう。それは、多くのスコットランド人が、今やイングランドや海外のイギリス領土で成功する機会を持っているというだけのことではなかった。もし文学の復活が、期待されている一般的な文化的復興の一部と成るべきものであるとすれば、それは、英語で成されなければならないであろう。そこで、スコットランド文学者たちは、形式とスタイルの諸問題、そして「スコットランド語法」を避けることに心を砕くことになった。⁽⁴⁾

自分たちの問題への解答を求める中で、スコットランド文学者はまた、イギリスとフランスの例に習い、会員たちが自分の作品を論じてもらうために提出できる文学クラブを設立した。それらの協会は、修辞学と哲学の結合としての文化というルネッサンス人文主義者たちの抱いたキケロ的見地に立っていたので、彼らの討論は、文学的問題に限られなかった。彼ら

(3) H. G. グラハム Graham『18世紀のスコットランド文学者』*Scottish Men of Letters in the Eighteenth Century* (London, 1908年) 382頁以下。本論文第VI章も見よ。

(4) 同上書。マッケロイ、同上論文。

は、一般的に向上、つまり作法、趣味、学識、文章構成法ばかりでなく、経済の向上にも熱中した。だから彼らは、言語、精神、認識論、人間の発達に関連する広範な諸問題を論じたのであった。特に、推測的歴史は、哲学と形式の諸問題への部分的解答と見られたのであった。⁽⁵⁾

モンボドの言語に関する初期の論文、それらは最終的には『言語の起源と進歩について』に組み込まれることになったのだが、それらの中には、セレクト協会の会合で提出されるために書かれたと思われるものがある。この協会は従って、『言語の起源と進歩について』の揺籃と見なしても良いだろう。それは丁度他の文学協会が、他のスコットランド哲学者や修辞家たちの作品を育んだのと同じである。⁽⁶⁾

幾人かのスコットランド人文主義者は、ラディマンも含めて、土着言語の復興に関心をもっていた。しかし、モンボドはこの動きには加わらなかった。他方、ゲール語に対する関心は、明らかに最小であった。オシアン Ossian の到来とロマンティシズムの始まりまでは、ゲール語は野蛮さを連想させたのである。しかし、アダム・ファーガスンは、ゲール語を話し、モンボドも比較の見地から一定の関心をもっていた。⁽⁷⁾

(5) マッケロイ, 6, 571-1 頁。また、一般的には、D. D. マッケロイ『スコットランドの向上の時代：18世紀のクラブと協会の調査』*Scotland's Age of Improvement: A Survey of Eighteenth Century Clubs and Societies* (Washington State University Press, Pullman, 1969 年) を見よ。

(6) クロイド, 17-18 頁。その大部分は、二つ折りのノートブックの形で、そのうちで最も重要なものは、「言語に関する論考」“Discourse on Language”（モンボド文書装丁二つ折り草稿5）である。本論文第 XIV 章を見よ。

(7) 土着語の復興とラディマンの役割りについては、一般的には、ダンカン、同上書。デイシャス (1964, 1967 年), F. W. フリーマン『ロバート・ファーガスンとスコットランド人文主義者の妥協』(Edinburgh, 1984 年) 第 1, 2 章も見よ。

ジョンソン博士は、ゲール語を「表現すべき思想を殆ど持たない、野蛮な民族の粗野な言葉」と考えていた。早くも 1616 年に、スコットランド議会のある法令では、高地地方に学校を設立することで英語を奨励する、ゲール語は野蛮の主な原因であるから、と述べている。(アレクサンダー・キャンベル Alexander Campbell 『エディンバラから北ブリテンの諸地方への旅…』*A Journey from Edinburgh through Parts of North Britain ...*, 2 巻, [London, 1802 年] 186-7 頁)。

いずれにせよ、スコットランド哲学者たちは、ゲール語を、そして、それと結び付いていた衰退しつつある高地文化を意識せざるを得なかった。1745-46 年のジャコバイトの反乱の後では特にそうであった。この意識は、言語と社会についての彼らの思考に触媒的な効果を及ぼしたに違いない。モンボドの場合には特にそうだった。彼には単に昔からのジャコバイトとの諸関係があっただけではなく、彼の領地は実質的には高地地方と境を接していたのである。⁽⁸⁾

同様にして、二つの統合の結果として、スコットランドから政治的諸制度が奪い去られたことそれ自体によって、スコットランド人は、人間、言語、社会の探究を促されたのである。⁽⁹⁾ ヒュームは次のように言っている。

「これは不思議なことではないでしょうか、われわれが、諸侯を失い、議会、独立した政府を失い、主要な貴族の存在さえ失い、話し癖や発音に不満を感じ、われわれが利用している言語の非常に崩れた方言を話しているときに、本当に、そんな状況にあって、われわれが実際にヨーロッパで最も文学的に優れた民族であるなどというのは、不思議なことではないでしょうか。」⁽¹⁰⁾

この時点でヒュームを引用するのは、適切である。というのは、彼の懐疑的哲学は、モンボドとリード Reid によると、ロックの観念の方法から出てきたもので、もう一つの問題、つまり懐疑論の問題を導入するものだからである。

この哲学的問題は、スコットランド啓蒙運動の発展にとって決定的に重

(8) ロザリンド・ミチソン Rosalind Mitchison 「政府と高地地方, 1707-1745 年」 "The Government and the Highlands, 1707-1745", 『向上の時代におけるスコットランド』 *Scotland in the Age of Improvement*, N. T. フィリップソン Phillipson とロザリンド・ミチソン編 (Edinburgh, 1970 年) 26-8 頁。

(9) ニコラス・フィリップソン Nicholas Phillipson 「スコットランド啓蒙運動」 "The Scottish Enlightenment", 『愛国的文脈における啓蒙運動』 *The Enlightenment in National Context*, ロイ・ポーター Roy Porter とミクラシュ・テイク Mikulàs Teich 編 (Cambridge, 1981 年) 22 頁。

(10) 1757 年 7 月 2 日付け, ギルバート・エリオット Gilbert Elliot へのデイヴィッド・ヒュームの手紙。E. C. モスナー 『デイヴィッド・ヒュームの生涯』 (Oxford, 1980 年) 370 頁の引用による。

要な役割を演じた。この問題は、『言語の起源と進歩について』ばかりでなく、スコットランド常識哲学にとっても触媒となったと考えられるのであり、ある程度までは、スコットランド道德哲学一般にとってもそうであったと見られるのである。⁽¹¹⁾

哲学的なディレンマは、モンボドによっては、文学的、文化的ディレンマと切り離せないものと見られていた。三つすべては、同じ問題、即ちスコットランド人文主義の衰退の異なった側面なのであった。

こうしてわれわれは、啓蒙運動一般の文化的プログラムに直面することになる。それは、スコットランド向上論者たちによって熱狂的に採用され、『言語の起源と進歩について』の理解にとって必須のものである。つまりキケロ的修辞学と、「人間の科学」言い換えれば、ロックと大陸の自然法学者から引き出されたイギリスの道德的経験論者の総括的な道德哲学との結合である。⁽¹²⁾

モンボドが十分意識していたように、修辞学と道德哲学との結合という考えそのものは、ルネッサンスに由来するものであった。修辞学の礼賛と「人間の科学」（即ち「道德の科学」）の双方は、キケロ的人文主義的理想と結び付いていたし、従って、言語の研究に基づいた真の人間科学の確立と係わっていた。それだけではなく、双方とも、そういう理由で、ロックが生き返らせたもう一つのルネッサンス的テーマと解き放ち難く結び付いていた。その主題とは、言語の起源と進歩の推測的歴史である。⁽¹³⁾

『言語の起源と進歩について』は、第一義的には、ロック的「人間の科学」に反駁し、アリストテレス的「人間の科学」を擁護するものと見なされねばならない。後者は、キケロ主義の修正に基づいており、モンボドの信念では、それによってキケロの修辞学を本来のアリストテレス的諸原則に復帰させることになるのであった。⁽¹⁴⁾

われわれはこれからまず、『言語の起源と進歩について』への一般的導入

(11) 一般的には、S. A. グレイヴ Grave『スコットランド常識哲学』*The Scottish Philosophy of Common Sense* (Oxford, 1960 年)

(12) 本論文第 V 章を見よ。

(13) 本論文第 VI 章を見よ。

(14) 同上。

のために、「人間の科学」とキケロ修辞学というより広い問題に向かうことにしよう。それから、とりわけロック、マンドヴィル、コンディヤック、ルソー、スミスそして、モンボド自身に係わる言語の起源に関する論戦というより特定的問題に向かうことになる。